

シエイクスピア総合受容年表 (天保11年〜明治45年)

(川戸道昭著『明治のシエイクスピア』より抜粋)

年表・索引編

オフィリヤの歌 (最終の曲節)

Very slowly and ad libitum

かへらぬぬか いなかへらぬぬか いな
 んーのかへらびろおし ^にたればおのがいのちの
 マターアハレヌミノカサレサヨアノヨラスタウ
 きわまでままと おのげはゆーきの
 タタビタマーへ
 しろじろとつむりはあーさのみだれがみ



松井須磨子「オフィリヤの歌」楽譜と挿絵
 (『文芸協会演劇／ハムレット』
 [帝国劇場、明治44年5月]より)

凡 例

本年表は天保11（一八四〇）年から明治45（一九一二）年7月にいたるまでの日本におけるシェイクスピアの受容に関する資料を調査してまとめたものである。

本年表の作成経緯を記すと、柳田泉の『明治初期翻訳文学の研究』（一九六一年、春秋社）と『西洋文学の移入』（一九七四年、春秋社）をもとに、それ以外の二、三の先行文献に掲載された資料を加え、さらに、編者が独自に調査・収集した資料をあわせて作成したものである。とくに、柳田の二書に記載のない明治30年以降の文献に関しては、編者と榎原貴教氏が『明治翻訳文学全集』《新聞雑誌編》（全52巻、一九九六〜二〇〇一年、大空社）の編纂を手がけるなかで収集した資料が少なからず含まれている。前回作成した「日本におけるシェイクスピア（天保11年〜明治45年）」（明治翻訳文学全集『シェイクスピア集』IV『所収』）よりもさらに一八〇点以上多い、合計約五七〇点の文献・資料が収録されている。柳田の二書のほかに参照させていただいた先行文献をあげると、山口武美編『日本沙翁書目集覧』（詩仙堂、一九三三年）、佐々木隆編『日本シェイクスピア総覧』（一九九〇年、エルピス）、高橋康也監修・佐々木隆編『シェイクスピア研究資料集成』別巻1・2（一九九八年、日本図書センター）等がある。記して感謝の意を表させていただく次第である。

表記の順序は刊行年月順とし、翻訳文献には★印、研究・紹介文献には☆印、演劇上演記録には▼印、観劇評には▽印、その他の文献および関連事項には◇印を付し、これを区別した。また、単行書は『』を、新聞・雑誌等に収録された資料には「」を作品名に付して、区別した。なお、翻訳文献に関しては「」のなかに原作名を記し、原書訳によるものはその下に（原書訳）、ラム姉弟によるものは（ラム）と明示した。それ以外のもの、あるいは原書訳ともラム姉弟の作品によるものとも特定できないものについてはなにも記さなかった。また、作品を日本の状況に置き換えた翻案に関しては、原作名の下に（翻案）と明示した。さらに、原資料を確認することはできなかったが、柳田泉『西洋文学の移入』に掲載があるものは「柳田『移入』による」と記して、他と区別した。

本年表作成のため、国立国会図書館および東京大学法学部明治新聞雑誌文庫の資料を利用させていただいた。

一八四〇〜四一（天保11〜12）年

☆『英文鑑』 マレイ著 渋川六蔵訳

「シャークスピール」の名がみえる（下編卷之一）。Lindley Murray, *English Grammar* のオランダ語版よりの重訳。

一八五三（嘉永6）年

☆『英吉利紀略』 陳逢衡・荒木審訓訳

「沙士比阿」の名がみえる。

一八六一（文久1）年

☆『英国志』 英国 慕維廉著

「古克斯畢」の名がある。

温知社

一八六九（明治2）年

11月◇横浜居留地の外国人により『ロミオとジュリエット』の「バルコニーの場」が上演される（8日）。

The Japan Times' Overland Mail 紙の11月19日号に、ファニー・レイナー嬢 (Miss. Fanny Raynor) とベニー氏 (Mr. Bennee) が、Yokohama Amateur Corps Dramatique のアシストを受けてそれを行ったとある（升本匡彦『横浜ゲーテ座』第二版参照）。高橋康也監修・佐々木隆編『シェイクスピア研究資料集成』（28巻）に記事の掲載がある。

◇この年クラレンドン版『ヴェニス商人』がイギリスで発行される。

The Merchant of Venice, ed. by W. G. Clark and W. A. Wright, Clarendon Press, Oxford, 1869.

一八七一（明治4）年

☆『西国立志編』スマイルズ著 中村正直訳

「舌克斯畢ノ事」「舌克斯畢ノ詩事」「金銭ノ当然ノ用及ビソノ妄用ヲ論ズ」。
◇ロルフ編『あらし』がニューヨークで発行される。

Tempest, ed. by W. J. Rolfe, New York, 1871.

一八七二（明治5）年

◇クラレンドン版『ハムレット』および『マクベス』がイギリスで発行される。

Hamlet, ed. by W. G. Clark and W. A. Wright, Clarendon Press, Oxford, 1872.

Macbeth, ed. by W. G. Clark and W. A. Wright, Clarendon Press, Oxford, 1872.

一八七三（明治6）年

10月◇ジェイムズ・サマーズ（James Summers）開成学校の教授に着任。

英文学および哲学担当。明治9年8月退官。

一八七四（明治7）年

1月★「ハムレットの独白」 ワーグマン

ジャパン・パンチ

「ハムレット」

有名なハムレットの独白の最初の日本語訳（ローマ字訳）。「Arimasu, arimasen, are wa nan deska（あります、ありません、あれ わ なん ですか）」。上演されたものかどうかも不明。

10月☆『泰西名言』全 石村貞一著

龍巖堂梅原亀七

「古克斯畢」の金言（『西国立志編』と同文）が17丁にある。

一八七五（明治8）年

1月◇横浜のゲーテ座（Gaiety Theatre）で、外国人により『ヘンリー四世第一部』が上演される（29日）。

The Japan Weekly Mail 紙に掲載されたそのときのプログラムが、升本匡彦『横浜ゲーテ座』（第二版）に掲載されている。それによると、*The Performance will commence with Three Scenes from the 1st Part of Shakespeare's Play of Henry IV.* とあり、作品の一部の上演であったことが推測される。

7月◇東京開成学校の学年末試験にシェイクスピアの問題が出題される。

東京開成学校では、ジェイムズ・サマーズが「普通科」の2学年と3学年を対象に英文学の講義を行い、双方の学年末試験（Final Examination, 1874-5）にシェイクスピアに関する問題を出題した。とりわけ3年生の試験においては、シェイクスピアに関する問題がその中心となっている。全部で10問ある同学年の問題（原文英文）の日本語訳を掲げると以下のとおり。

- 一 詩と散文の違いを述べ、それぞれの例を数例あげよ。
- 二 劇とは何か。また、それは英文学にいかなる影響を与えたか。
- 三 イングランドにおける演劇の歴史を簡単に述べよ。最初に英語の悲劇を書いたのはだれか。その最初の二幕を分析せよ。
- 四 チョーサー、シェイクスピア、ミルトンはそれぞれ英文学にどんな影響を与えたか。

五 シェイクスピアはなぜかくも高い評価を受けているか。また、スペンサーはなぜシェイクスピアほど読まれないのか。

六 二人の作家の特徴およびミルトンの特徴を述べよ。

七 ハムレットが父の亡霊に呼びかける台詞を一〇行引用し、そのうちの数行をパラフレーズせよ。

八 次の表現を説明せよ（このあと『ハムレット』一幕五場より原文の引用があるが省略）。

九 英文学はどこから最大のインスピレーションを得たか。いかなる出来事や伝統、環境からそれを得たか。

一〇 一八、一九世紀の著名作家六人の名前と作品をあげよ。

以上 *The Calendar of the Tokio Kaisei-Gakko, or Imperial University of Tokio for the Year 1875, published by the Director, 1875. 249.*

9月★「葉武列士」 仮名垣魯文

「ハムレット」

平仮名絵入新聞 7日〜10日

『ハムレット』の内容を歌舞伎の「筋書」風に記したもの。3回のみで打ち切りとなった。他に先駆けて「其筋書を記載せしが、未だ時好に摘はずして先王の幽霊と共に立消」になったと、のちに魯文は述懐している（明治19年「葉武列士倭錦絵」）。第一回の冒頭の台詞を記すと、「〇此頃毎夜深更におよび、怪しき姿のもの此堀端を通行なすよし、正しく狐狸の仕業ならん。何にもせよ王城間近く奇怪の振まひ、我々今宵此所にて其生ま。

体を顕しくれんと思入れ、仕打十分ある」云々。

◇この年までに、東京書籍館にシェイクスピアの原書3冊が架蔵される。

東京書籍館（東京図書館）においては、この年までに、クラレンドン版の『ハムレット』『マクス』『ヴェニス商人』の3冊が架蔵される。そのことは、現在国立国会図書館に所蔵されているこれら三書のタイトルページに「明治八年文部省交付」の朱印と「東京図書館蔵書之印」が押されているところから判断できる。

一八七六（明治9）年

6月◇東京書籍館にシェイクスピアの全集数種が架蔵される。

この年6月までに東京書籍館に所蔵されたシェイクスピア作品の洋書の明細は以下のとおり（*A Classified Catalogue of the Books of the Tokio Shoseki-Kwan*, published for distribution by the Library, 1876. 244頁）。

1. Dramatic Works of Shakespeare. 8vo. London 1870.
2. Works of Shakespeare, edited by M. C. Clarke. 8vo. New York 1868.
3. The Same, edited by R. G. White. 12mo., 12vols. Boston 1872.
4. Scholar, edited by R. G. White. 8vo. New York 1854.
5. Select Plays, edited by W. G. Clark M. A., & W. Wright, M. A. 16mo., total 4vols., Oxford 1871.

(1) Hamlet, Prince of Denmark.

(2) Macbeth.

(3) Merchant of Venice.

(4) Tragedy of King Richard II.

6. Tempest, edited by Rev. J. M. Jephson, 2nd ed. 16mo., London & New York 1872.

7. Complete Works of Shakespeare, by M. C. Clarke. (the 11th vol. in Nimmo's

Collection of British Writers, 13vols., 1870-72.)

ほか「German Books」中に次の書物がある。

1. Shakesper, W. Dramatische Werke. 12mo., Pamp., 12 Bde. Berlin 1874.

2. Universal Bibliothek:

31. Shakespere, W.

(1) Romeo & Julie

(2) Othello

◇坪内逍遙、アメリカ人教師からハムレットの独白を聞く。

この年前半、逍遙は、愛知英語学校の四年に在籍し（明治九年七月卒業）、アメリカ人教師のマクレラン (J. A. MacLellan) からハムレットの独白の朗読を聞く。

「私にもマックレランに就いては比較的深い印象が残つてゐる。彼れは多少エロキューションに年季を入れた人で、もあつた敷、たしかに朗読は上手であつた。教科書中にシエークスピヤからの抜文が随分あつたが、彼れが『ハムレット』の独白を、立つて、身振まじりで、ポケットのナイフを逆手に持つて『ツービー・オア・ナット・ツービー』などと表情までして朗読してくれたのは、不思議に今も尚ほ耳目に残つてゐる。私が外

国劇のセリフ廻しらしいものを聴いたのは、実際それが初耳であった。」（「学生時代の追憶」『逍遙選集』12巻）。

ここでマクレランが用いた「教科書」については、加藤詔士『愛知一中旧蔵書目録』にみられる英学教科書（『英学史研究』31号）に詳しい。それによると、逍遙らのクラスで用いられた英語教科書は、『ウイルソン第五読本』であった可能性が高く、そこにはハムレットの独白の抜粋のほか、『ハムレット』、『ヴェニス商人』、『ジュリアス・シーザー』などからの抜粋が数多く認められるという。

◇東京開成学校の教科書としてシェイクスピアの作品が用いられる。

この年発行された『東京開成学校一覽 明治九年』（発行月記載なし）に、同校の「普通科」で教えられていた「英文学 修辞学 論理学」の「教科書目」として「マルシ氏著 英語歴史／モルレー氏著 英文学歴史／アンドルワード氏著 英文学袖珍／ヘブソン氏著 修辞学 ベーン氏著 同書／フォーレル氏著 演繹論理学／シェイクスピア」の記載がある（55～56頁）。

◇工部大学校にシェイクスピアの原書2冊が架蔵される。

この年発行された英文の『工部大学校図書目録』（*Library of Imperial College of Engineering, Tokyo, 1876*）にクラレンドン版の『ヴェニスの商人』と『マクベス』が所蔵されていたとある（21頁）。

一八七七（明治10）年

2月☆『改正 西国立志編』スマイルス著 中村正直

木平謙蔵板

「舌克斯畢ノ事」 21〜23頁、ほか。初版の発行は明治4年。

3月◇ウイリアム・ホートン、東京開成学校の英文学教師に着任。

米国人ウイリアム・ホートン (William Houghton) は、この年3月、東京開成学校の英文学教師に着任。4月からは、東京開成学校が発展的に改組されて成った東京大学において、シェイクスピアをはじめとする英文学作品の講義を行い、坪内逍遙らに多大な影響を与えた。明治15年7月、満期前に職を辞し米国に帰国。

9月◇東京大学にシェイクスピア全集が架蔵される。

この年9月の段階で調査した東京大学図書館の『英書目録』に記載されているシェイクスピア関係の原書は以下のとおり。

Works of Shakespeare, ed. by Dyce. 9vols.

Shakespeare Gems, by the Author of "The Book of Familiar Quotations."

12月★「胸肉の奇訟」 無署名 『民間雑誌』(2日〜9日)

「ヴェニス商人」

「いろいろの事情を考えて、これは、藤田茂吉(鳴鶴)の仕業であるかと思う。……紹介の仕方が物語風であるところ、ラムに依つたらしく見えるのも、藤田らしく思わせる」(柳田泉『移入』)。その冒頭の一文を記すと、「今は昔、堺の浦に松枝節之助と云ふ富豪ありける。其父は原もと関東の某侯に仕へ、勲功も殊に多かりければ、君の覚おぼえ一と方ならず、頓に出世したりしかば、高木風に悪まるの喩、忽ち金を爍とひかすの衆口の讒舌に逢ひ……」というもの。

◇ホートンのシェイクスピア講義がはじまる。

東京大学では、ホートンが、この年9月から翌年8月までの学年の2学期後半に、文学部2年の授業で「クレーク氏」の「シェイクスピア文集」をテキストとして使用（『東京大学法理文学部第六年報 自明治十年九月／至同十一年八月』による）。

◇この年までに東京書籍館にロルフ編『あらし』（原書）が架蔵される。

一八七八（明治11）年

9月◇坪内逍遙、東京大学文学部本科第1年級に進学。

9月◇東京大学図書館に新たなシェイクスピア全集が架蔵される。

明治10年9月から同11年9月の間に東京大学の図書館に架蔵されたシェイクスピアの原書は次の通り。この年になってシェイクスピアの原書が増えるのは前年同校の英文学教師に着任したホートンの影響があるものと思われる。

1. Plays of Shakespeare. 3vols.

2. Shakespeare Select Plays, ed. by W. G. Clark and W. A. Wright.

(1) Hamlet

(2) King Lear

(3) Macbeth

(4) Tempest

(5) The Merchant of Venice

(6) King Richard II

3. Works of Shakespeare by H. N. Hudson. 11vols.

4. Same by R. G. White. 12vols.

以上『東京大学法理文学部／図書館英書目録 第二 自明治十年九月 到同十一年九月』（東京大学、明治11年）による。

9月◇ホートンの本格的なシェイクスピア講義がはじまる。

東京大学において、この年9月から始まる学年（翌年8月終了）の授業で、ホートン教授が用いた英文教科書で主なものをあげると、文学部3年で『ジュリアス・シーザー』『ヴェニスの商人』『ハムレット』『リア王』の4作品と、「クレীগ氏」の「イングリシ、オフ、シェーキスピール」、文学部2年で『ヴェニスの商人』、「クレীগ氏」の「イングリシ、オフ、シェーキスピール」など（『東京大学法理文学部第七年報 自明治十一年九月／至同十二年八月』による）。

◇この頃、河竹黙阿弥、『ハムレット』の梗概を記す。

「これは一昨年の末に、私が伝記を調べるに就いて、古い書物を入れた箱の中から拾ひ出したもので、私の推測によると確かに明治十一年か十二年の手書であると思ふ。……而して今一つの推測はその梗概が十中の八九は福地桜痴居士から得たものであらう考へられることである。」（河竹繁俊「沙翁と黙阿弥」『早稲田文学』沙翁記念号、一九一六年四月）。文例をあげると、「①城外。武官ベナルド、マルセリス洞長三人先帝の靈に逢ふ。②御殿。宮内卿ホロニス「息レイルテス、王即位の祝に來りし事。「親王ハムレット一人喪服にて出る……」云々。『早稲田文学』（沙翁記念号）にその全文が掲載され

ている。河竹登志夫氏の『日本のハムレット』によると、オリジナル稿は関東大震災の折に焼失したという。

◇この年東京大学から『ヴェニス商人』の英語教科書が発行される。

The Merchant of Venice, ed. by W. G. Clark and W. A. Wright, Department of Literature in Tokio Daigaku, 1878. これは、同年東京大学に架蔵されたクラレンドン版の翻刻と思われる。

一八七九（明治12）年

1月☆『西哲格言鈔』全

内藤伝右衛門編纂・出版

「古克斯畢」の金言が48丁にある。

2月☆『奚般氏著心理学』下冊 西周訳

文部省印行

『シーザー』の一節の漢文訳を含む（下冊72〜73頁）。

3月★「新約繁昌記 劇場」 曾総道人

驥尾団子 〳6月

「ハムレット」

4月★「(ロミオ)ト(ジュリエット)ノ話」

喜楽の友 〳8月

「ロミオとジュリエット(ラム)」

ラムの作と明記された本邦初の「ロミオとジュリエット」の紹介。われわれが『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》』を編纂するなかで発見した新資料。この時代のものとしては比較的忠実に原文を写したものだといえる。冒頭の前文と訳文を記すと以下のとおり。

5月☆『伊呂波分』

「英国ニ於テ有名ナル狂言作者（セーキスビール）氏ガ芝居ガ、リニ著述セル書物ノ中最モ面白キ話ヲ同国人（チャールスラム）氏ガ通俗ノ文ニテ綴リタル珍書ヲ得ケレバ毎号訳文一條ヲ載セ江湖同好ノ諸友ニ示サント欲スノ（ロミオ）ト（ジュリエット）ノ話ノ伊太利国（ウエロナ）ノ都ニ富豪ノ聞エ高キニ家アリ。一ヲ（モンテグ）ト云ヒ、一ヲ（カピレット）ト云フ。両家共ニ巨万ノ財産ヲ有シ、負ケズ劣ラス身代ニテアリシガ、昔ヨリ両家ノ交際兎角ニ疎マシク……」。

西洋人名字引 訳纂並出版人 吉田五十穂

「シェークスピア」 214～215頁

シェイクスピアの生没年、略歴、主要作品を明記した本邦初の本格的な経歴紹介。柳田泉によれば、実際にこれを手がけたのは、吉田五十穂ではなく、福沢諭吉らとともに遣米使節団に随行した尺振八であったという。詳しくは本書第三章「シェイクスピアと明治の西洋人名辞典」参照。

8月★「訳詩（五編）」 吾妻平治訳

同人社文学雑誌

「原作不明」

9月◇坪内逍遙、ホートンのシェイクスピア講義を受講。

東京大学において、この年9月からじまる学年（翌年8月終了）の授業で、ホートンが用いた英文教科書で主なものをあげると、文学部3年で『ヴェニス商人』『マクベス』『ハムレット』『リア王』の4作品、文学部2年で『ジュリアス・シーザー』『ヴェニス商人』『あらし』『リチャード二世』の4作品（『東京大学法理文学部第八年報 自

明治十二年九月／至同十三年八月』による)。坪内逍遙はこのとき文学部2年に在籍し、彼らの学年に出題されたホートンの試験問題は以下のようなものであった。「次なるキヤクターの輪郭を記せ——シーザー、キャリバン、ジェシカ、リチャードの叔父ヨーク公」(原文英文、『東京大学法理文学部一覽 明治一三、一四年』〔英文〕による)。これをみても実際に上記の4作品が講じられたことがわかる。

◇この年、和田垣謙三、『リア王』の漢文訳を試みる(未刊)。

「これは『キング・リア』の筋を漢文で簡単にをつづつたもので、その原稿は早稲田大学演劇博物館に保存されている。」和田垣が「まだ東京大学学生時代夏休みに箱根で」書いたものだという。文例、「李王者英国之王也。資性聡明。及王即位百廢共起。惡弊立止。民各樂其業。王有女三」。(以上豊田実『日本英学史の研究』による)

一八八〇(明治13)年

7月☆『西哲小伝』 訳纂並出版人 吉田五十穂

明治12年5月刊行『伊呂波分 西洋人名字引』の改題本。内容も同一。

9月◇坪内逍遙、東京大学の文学部3年に進級。

この年9月から始まる学年(翌年8月終了)において、ホートンが文学部3年に『ハムレット』を講じたことが、『東京大学第一年報 起明治十三年九月／止同十四年十二月』によって確認できる。同年報中の「英文学教師ホートン申報」には「文学部第三年級ニ講授専修セシメシ書ハハムレット、オフ、シエキスピヤ…」とある。そのホートンの『ハムレット』の試験に「悪い点」を取り、西洋小説の評論を読みはじめたことが、

逍遙が『小説神髓』を書くきっかけになったといわれる。彼は、ホートンの授業について次のように回想する。「英文学はホートンといふ紳士の教授の受持で、チョーサーやスペンサーやミルトン、シェークスピアを主として講じた。学殖は豊富らしかつたが、講義振りは純然たる学究だつた上に、眠たい、低い調子でポツリポツリ、而も私にはやつと六七分通りしか解らない英語で講じたのだから、課目には同情を持ちながら、なまけ者の私なぞは余り裨益する所がなかつた。シェークスピアの「ハムレット」の試験に王妃ガートルードのキャラクターの解剖を命ぜられて、初めての時には其意味が解りかね、「性格を評せよ」といふのだからと、主として道義評をして、わるい点を付けられ、それに懲りて、図書館を漁り、はじめて西洋小説の評論を読み出した。」（「回憶漫談」『早稲田文学』、一九二五年七月）

11月☆『泰西名士鑑』 翻訳兼出版人 乾立夫・中原淳蔵

「維廉沙士比阿伝」 221〜237頁

「卷之四」の「詩歌部」にシェイクスピアの伝記が17ページにわたり掲載されている。文例をあげると、たとえば、シェイクスピアの温和な性質について、ベン・ジョンソンの証言をもとに、こう記されている。「沙士比阿、性質溫柔、交際懇切ナルヲ以テ晩年ニ至テ大ニ人望ヲ得タリ。……本戎遜曰ク、吾彼ヲ愛ス、吾彼ノ姿ヲ想起シテ之ヲ敬スル宛モ、仏者ガ偶像ヲ敬スル如シ。彼ハ実ニ正直ニシテ、人ニ接スルニ温和ヲ以テシ、難ニ処スルニ、勇敢ヲ以テス。然レドモ興ニ乗ジテ言ヲ過ツノ弊アリ、ト」。訳者のひとり中原淳蔵は、熊本洋学校を経て、工学寮（のち工部大学校）に入学。『泰西名士鑑』

は同校在学中に出版されたもの（古澤基生「中原淳蔵と原田助」『熊本英学史』「本邦書籍、一九八五年」）。工部大学校では明治9年にクラレンドン版の『ヴェニス商人』

『マクベス』が所蔵されるなど、シェイクスピアとのつながりが注目される。

一月★「ロミオとジュリエットの紹介」

「ロミオとジュリエット」（柳田泉による）

伊勢古事記日曜叢誌 17号

一八八一（明治14）年

◇この頃、外山正一『ハムレット』の翻訳を試みる。

「外山正一『山存稿』中にシェイクスピア『ハムレット』の訳あり（第三幕あたりまで）、題して「諸行無常・靈驗皇子の仇討」という。訳筆をとりし年代未詳なるも、種々の証跡を考え合せて、明治十四、五年のものとするのが妥当であるらしい。」（柳田『移入』、『山存稿』（明治42年3月）に掲載されたタイトルは、柳田の誤記で、正しくは「西洋浄瑠璃／ハムレット 靈驗皇子の仇討」というもの。豊田実の『日本英学史の研究』によると、東京大学付属図書館には4種類の訳稿が保存されており、その最も古いと推定されるもののタイトルは、「シェイクスピア氏諸行無常靈現皇子の仇討」というもの。それぞれの訳稿の成立時期に関連して注目されるのは、最初、角書きに「シェイクスピア氏諸行無常」と記されていたものが、途中から「西洋浄瑠璃／ハムレット」と改められている点である。シェイクスピアの翻訳を最初に浄瑠璃の語り的手法と結びつけたことで知られるのは、坪内逍遙の『自由太刀余波鋭鋒』（明治17年5月）で、逍遙は「附言」のなかで、「全文意味の通じ易きを専要とし、浄瑠璃にてす「す」め易き

一八八二（明治15）年

所は之にしたがひ台辞にして解し易き所は又之に従ふ」と断っている。逍遙のこの翻訳を機に、河島敬藏の『春情浮世之夢』（明治19年5月）や仮名垣魯文の「葉武列士倭錦絵」（同10月）など、日本のシェイクスピアの翻訳の多くが「院本」（浄瑠璃本）口調に傾いていったところをみると、外山の「無常靈現皇子の仇討」もその流れを受けての改作であったと推測される。このことは、明治10年代のシェイクスピアの翻訳を考える上で、特に注意を払わなければならない重要なポイントである。

3月★『「ハムレット」中の一段』 矢田部良吉訳

東洋学芸雑誌

「ハムレット」

3月★「高僧ウルゼー」 外山正一訳

郵便報知新聞 25日

「ヘンリー八世」

4月★『「ヘヌリー第四世」中の一段』 外山正一訳

郵便報知新聞 19日

「ヘンリー四世」

8月★『新体詩抄』初編 外山正一（ゝ山）ほか

丸家善七

矢田部良吉「ハムレット」

外山正一「ハムレット」ヘンリー四世 ヘンリー八世」

有名なハムレットの独白を矢田部と外山の両方が翻訳を試みている。その「シェイクスピアル氏ハムレット中の一段」の文例は以下のとおり。「ながららふべきか但し又／ながらふべきに非るか／爰が思案のしどころぞ／運命いかにつたなきも／これに堪ふるが

大丈夫か／又さはあらで海よりも／深き遺恨に手向ふて／之を晴らすがものゝふか／どふも心に落ちかぬる」(矢田部)、「死ぬるが増か生くるが増か／思案をするはこゝぞかし／つたなき運の情なく／うきめからきめ重なるも／堪へ忍ぶが男児ぞよ／又もおもへばさはあらで／一そのことに二つなき／露の玉の緒うちきりて／死んで眠りてそれぎりと／からきくるしき世の中を／さらりと去つて消え行くも／卑怯の業にあらぬかや」(外山)。『新体詩抄』の出版時期は中扉には「明治十五年七月刊行」とあるが、奥付は「八月出版」となっており、ここでは奥付に従った。

9月◇外山正一、東京大学において『ハムレット』を講じる。

この年、東京大学の「哲学史学及英文学教授」であつた外山正一は、理学部2年生に毎週3時間、哲学科2年生に毎週1時間、英語を教えていたが、彼が使用した教科書は、理学部ではシェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』、およびエマソンの『文化と行動』(Culture and Behavior)、哲学科ではシェイクスピアの『ハムレット』とエマソンの『文明論』(Civilization)などであつた。同じく「英文学羅旬語講師」神田乃武は、理学部1年生と「法文学」部1年生を担当していたが、理学部では『ヴェニス商人』、『ラセラス』等を教科書として使用し、「法文学」部では『マクベス』やエマソンの作品などを用いたということが報告されている。(『東京大学第三年報 起明治十五年九月／止同十六年十二月』による)。

9月◇東京専門学校が開設され、『ジュリアス・シーザー』が講じられる。

東京専門学校(早稲田大学の前身)から発行された『東京専門学校年報 明治十五年度』

一八八三（明治16）年

2月★「歐洲戯曲

ジュリアス・シーザルの劇」 無署名

日本立憲政党新聞 27日〜4月11日

「ジュリアス・シーザー（原書訳）」

によると、「英語学科」の「本科」「第一級」「読法」の授業で「シェイクスピア氏院本シーザー」が講じられたとある。東京専門学校では、「政法理ノ三学科ヲ教授シ、傍ラ英書ヲ自読スルノ力ヲ養ハシムル為メ英語学科ヲ設ク」というように、政治・法律・理学の3学科の英書講読力の養成を図るために置かれた「英語学科」で、『ジュリアス・シーザー』の講読が行われた。「英語学科」の課程は4年で、その最上級の半年間に、週12時間を費やして「スペンサー氏制度論」「ボエン氏哲学史」「ホルランド氏法理論」とともに「シーザー」が講読されたとあるから、単純に計算しても週に3時間はその講読に当てられたことになる。「英語学科」の講師は大隈英麿、高田早苗、坪内雄蔵、天野為之の4名で、そのいずれかが担当したものと思われる。同校では、その後も数年間、「英語学科」の「読法」の授業で『ジュリアス・シーザー』が取りあげられた。このことは、明治10年代の『ジュリアス・シーザー』の流行を考える際に、忘れてはならない重要な事実と思われる。

本邦初のシェイクスピア作品の原書訳。無署名ではあるが、これを訳したのは河島敬蔵で、小宮山天香がそれに文飾を加えたものらしい。明治19年に『羅馬盛衰鑑』という題名で単行本になった際に、二人の「戯訳」として刊行されことからそれがわかる。河島の晩年に直接本人と会って、翻訳の経緯を詳しく尋ねた竹村覚は、「ジュリアス、シー

ザルの劇」の意義について、次のように述べている。「これこそ我国最初の原文による逐字訳……坪内博士の方『自由太刀余波鋭鋒』は、……院本風の意識とも言ふべきもので、原文に忠実な点から言へば、何と言つても、河島翁の訳の方が一段優れてゐる。年代的に言つても、河島翁の訳が、『本邦最初の完訳』としての資格をそなへてゐることは否定できない。」(竹村寛「日本における Shakespeare 劇の伝来について」『日本英学発達史』(一九三三年))。三幕二場の有名なアントニーの演説から文例を引くと、「我が貴ぶべき羅馬の諸君よ……我が親愛する同胞人民よ、こひがは冀くハ余に諸君の耳を仮かされよ。余が此に来れるは彼のシーザルを葬むる為めにして彼シーザルを崇むる為めにハあらざるなり。」「第一回」の序文にサミュエル・ジョンソンのシェイクスピア評が紹介されている。

3月★「春宵夜話(ゼ ウイントルス テール)」 藤田茂吉訳 郵便報知新聞 14日〜28日

「冬物語(ラム)」

藤田はその後明治18年8月までの間に、ラム姉弟の『シェイクスピア物語』中の8話を訳出し、自ら主筆を勤める『郵便報知新聞』に連載する。そこに取りあげられた8話中、「ハムレット」と「ロミオとジュリエット」をのぞく6話までが、シェイクスピア・ストーリーの紹介として日本で最初の紹介であったことは注目されてよい。つまり、「冬物語」「お気に召すまま」「ヴェローナの二紳士」「シンベリオン」「マクベス」「終りよければすべてよし」の6篇は、藤田が最初に日本にそのストーリーを紹介したことになる。

4月★「春宵夜話 セキスビーヤの筋書 As you like it」 藤田茂吉訳

郵便報知新聞 5日～5月1日

「お気に召すまま(ラム)」

5月★「春宵夜話 The two gentlemen of Verona」 藤田茂吉訳 郵便報知新聞 3日～24日

「ヴェロナの二紳士(ラム)」

6月★「春宵夜話 ハムレット」 藤田茂吉訳 郵便報知新聞 2日～21日

「ハムレット(ラム)」

7月★『仏国某州領主 麻吉侯情話』 藤田鳴鶴 春夢楼「御届」

「お気に召すまま(ラム)」

同年4月に『郵便報知新聞』に連載された「セキスビーヤの筋書 As you like it」を単行本にしたもの。柳田泉の『明治初期翻訳文学の研究』によると、「絵入人情西基斯比耶叢書 No.1」とある由。『郵便報知新聞』に訳載されたシェイクスピア物語のシリーズ化を試みたものと思われるが、出版はこの一冊だけで終わった。シェイクスピア物語の翻訳を収めた日本で最初の単行書。

10月★『^{西洋}人肉質入裁判』 井上勤訳 長島永豊

「ヴェニス商人(ラム)」

一八八四(明治17)年

1月☆『各国演劇史』 永井徹著 舞楽園発售 田中和助出版

「英国演戯及び劇場の沿革」中に「セキスビーヤ」の記載がある。

2月★「欧州奇聞花月情話」 菊亭香水訳

函右日報 8日〜21日

「ロミオとジュリエット」

5月★『該撒
奇談 自由太刀餘波銳鋒』 坪内雄蔵（逍遙）

東洋館発兌

「ジュリアス・シーザー（原書訳）」

「ヂュリヤス・シーザー」の訳は『自由太刀余波銳鋒』といふ丸本の名題めく書名でも解る如く、文体は浄瑠璃まがひの七五調で、至つてだらしない自由訳であつた。それは、要するに、自分だけの上でなく、わが翻訳文学の第一期であつた。」（坪内逍遙「自分の翻訳について」）

5月★『翻刻 新体詩歌』 竹内隆信編輯

内藤伝右衛門翻刻

『新体詩抄』の訳詩の再録。

12月★『新体詩鈔』 外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎撰 丸屋善七

『新体詩抄』の再版。

12月★「花間の一夢」 藤田茂吉訳 郵便報知新聞 16日〜31日

「シンベリン（ラム）」

◇東京図書館にシェイクスピアの全集数種が所蔵されている。

この年発行された『東京図書館洋書目録』（発行月記載なし）に掲載されているシェイクスピア関係の原書は以下のとおり。

Complete Works, with biographical sketch by M. C. Clarke, n. d.

Dramatic Works, with a biographical memoir, New York, n. d.

Same, with life and a copious glossary, London, 1870.

Scholar: being historical and critical studies of his text, characters, and commentators, New York, 1854.

Select Plays, ed. by W. G. Clark and W. A. Wright, Oxford, 1869-72. 4vols. *Hamlet*,

Macbeth, *Merchant of Venice*, *Tragedy of King Richard II*.

Same, Marchant of Venice, Tokio, 1878.

Tempest, ed. by J. M. Jephson, London and New York, 2nd ed., 1871.

Works, ed. by R. G. White, Boston, 1872. 12vols.

Same, ed. by W. G. Clark and W. A. Wright, London and New York, 1871.

Same, ed., with a scrupulous revision of the text by M. C. Clarke, New York, 1868.

一八八五（明治18）年

4月★「何桜彼桜銭世中」 宇田川文海

大阪朝日新聞 10日〜5月20日

〔ヴェニスヴェニスの商人（翻案）〕

有名な法廷法廷の場（「東役所裁決裁決の場」）におけるポーシア（米田小三郎に扮した中川玉栄）とシャイロック（榊屋五兵衛）の会話は次のとおり。《米田「されば今其方そのほう、伝次郎の胸三寸を切取るに当り、此伝次郎の血液血液をば仮令たとひ一滴半点たりとも地上ちのちに落し、又は衣服を汚しなどし、又は包丁に血を塗りなば、其方は謀りて人を殺す者、則すなはち謀殺むさくしの罪を犯せし世に憎むべき罪人なれば公儀おおいの法律おおいに照して死刑に行ひ、尚其上に其方の家蔵、家産けつさんを没収めつしゆにいたすぞ。夫それでも其方は伝次郎の胸三寸を切取るか。五兵「サア夫は。

「マクベス (ラム)」

7月★「雨後の花」 藤田茂吉訳

郵便報知新聞 22日～8月11日

「終りよければすべてよし (ラム)」

7月★「甸国皇子 班烈多物語」 坪内逍遙訳

中央学術雑誌

「ハムレット」

10月★「人肉質入裁判」 巖本善治訳

文学叢誌 11月

「ヴェニス商人」

巻頭に「ウィリアム・シェクスピアの伝」がある。

10月★『世界旅行 万国名所図絵 卷之三』 青木恒三郎編・発行

「ロミオとジュリエットの「二幕二場」までの筋書き」

「欧羅巴州の中」の「演劇場」の解説の中に「セツキスピア」のことと『ロミオとジュリエット』の筋書きがでくる(21～30頁+5頁)。有名なバルコニーの場の銅版画あり。

11月★「マツカベス」 無署名

文学雑誌 19年3月

「マクベス」

12月☆「Shakespeare, s Macbeth」

The Student 1巻2、3号

W. D. Cox の *Glimpses of English Literature for Japanese Students* (丸善、明治16年)からの抜粋(英文)。*The Student* という雑誌は片山清太郎編集、吉岡書籍店発行の日本で最初の英語学習雑誌の一つ(明治18年11月創刊)。W. D. Cox や神田乃武ら高名

一八八六（明治19）年

な英語学者が関与していた。3号以降、『横文学士学術雑誌』の和文名が付される。

1月★『何桜彼桜銭世中』 雨の家狸遊編 中村善兵衛編輯 文宝堂

〔ヴェニスの商人（翻案）〕

前年4月から5月にかけて『大阪朝日新聞』に連載された翻案の単行本。

3月☆『Shakespeare, s Comedy of Errors』 The Student 1巻5号

W. D. Cox の *Glimpses of English Literature for Japanese Students*（丸善、明治16

年）からの抜粋（英文）。

4月☆「舌克斯畢の伝」 教育雑誌 第3号以下 〔6月

5月★『春情浮世之夢』 河島敬蔵 耕文舎

〔ロミオとジュリエット（原書訳）〕

河島は、明治16年に「ジュリアス・シーザルの劇」を『日本立憲政黨新聞』に掲げて、シェイクスピアの原書訳の先鞭をつけた人物。「ジュリアス・シーザルの劇」では、特に日本の伝統芸能風の味つけはみられなかったが、『春情浮世之夢』になると、「此書体裁ハ坪内君ノシーザル奇談ニ習ヒ、毎齣ノ初、訳者ノ意見ヲ以テ院本体ノ冒頭ヲ付」すと、方針を変えた（緒言）。実際に、その訳文は「実にや浮世は夢の夢、親睦ひつとすぎて仇敵だとなり、仇敵あだ極だりて友善なかよなる、有為たど転変へんの世の譬たと……」と、逍遙たんとの『自由太刀余波あ鋭鋒と』に倣なった「操曲あやつり浄じやうり」風のものになつた。河島は、上記二篇のほかに、明治16年から18年にかけて、『ハムレット』『夏の世の夢』『あらし』『ジョン王』『オセロー』

『マクベス』『コリオレイナス』『リア王』の翻訳を行ったという。その稿本を入手した竹村覚は、『日本英学発達史』のなかで、それぞれの翻訳の特徴について報告している。

5月☆ *Tales from Shakspeare*, by Charles Lamb, Tokyo: S. Sawaya, 1886.

本邦最初のラム姉弟の『シェイクスピア物語』の英語教科書（澤屋・井上蘇吉出版）。『シェイクスピア物語』は明治期の最もポピュラーな英語教科書の一つで、現在知られる限りでも七種類の異なる版が発行されている。この澤屋版は「リア王」「マクベス」「アテネのタイモン」「ロミオとジュリエット」「ハムレット」「オセロー」の6編を収録。本書は明治21年5月に敬業社から再版が発行された。

7月☆ 『万国史要』下巻 斯因頓著 松島剛訳 春陽堂

「ウイリアムシェイクスピア」 577～578頁

7月☆ 高田半峯 「日本の意匠及情交 芝居之部」 中央学術雑誌 8月 32・33・35号

シェイクスピア作品を基準にして「改良演劇論」の批判を展開。

8月★ 『泰西奇談 冬物語・因果物語』 仁田桂次郎訳 仁田桂次郎

「冬物語 尺には尺を（ラム）」

仁田は、ラム姉弟の物語のうち、「冬物語」「尺には尺を」「じゃじゃ馬馴らし」「あらし」「アテネのタイモン」の5篇を4冊の書物に分冊・刊行した。そのうちの1冊『泰西奇談 嵐の巻』の巻末広告に、「泰西奇談ハ篇ヲ逐テ出版シニ拾篇ニ及デ全尾トナルベシ」とあり、続刊が予定されていたことがわかる。しかし、肺を病んでいた仁田には計画を完結させる余力もなくわずか33歳という若さで逝った。本書には、慶応義塾の同

窓生であった尾崎行雄が序文を寄せている。

8月◇末松謙澄、演劇改良会を発足。

「演劇改良会の組織が発表されたのは明治十九年八月で、その目的として標榜したのは、次の三ヶ条であつた。

(一) 従来演劇の陋習を改良し、好演劇を實際に出さしめる事。

(二) 演劇脚本の著作をして荣誉ある業たらしむる事。

(三) 構造完全にして演劇其他音楽会唱歌会等の用に供すべき一演技場を構造する事。

なほ、これに付随して、詳細な趣意書も補足的に添へられてあつた。……(一)に就いては、我が国の演劇は猥雑野卑で、紳士淑女の眼にすべからざるものが極めて多いから、新時代に適応した内容のものたらしめたい。俳優も、日常生活に留意し、人格を高めよ。興行時間も長過ぎるから幕数を減じて短縮せよ。女形は全部女優に代へよ。……(二)については、現今の脚本作者は、無学無識で「学術文章の士」といふものはない。これは版權興行の制度が備はらず、社会的に待遇するの方途も講ぜられてゐないからである。よろしく荣誉ある業たらしめなければならぬ。(三)については、早速欧米風の大劇場を建設して、花道や廻り舞台を廃し、背景画も西洋風に改めよといふのであつて、渋沢・大倉・安田等財界巨頭の賛助も得、二十五万円の株式会社を興さうといふことにまでなつた。」(河竹繁俊『新劇運動の黎明期』)。

9月★『沙吉比
亜戯曲』

羅馬盛衰鑑』 河島敬蔵・小宮山天香戯記

駸々堂本店

「ジュリアス・シーザー(原書訳)」

明治16年に『日本立憲政党新聞』に掲載された「ジュリアス、シーザルの劇」を単行本にしたもの。新聞掲載のときは無署名であったが、今回は、鷲林学人（河島敬蔵）と天香逸史（小宮山天香）の「戯訳」と明記されている。この作品で注目されるのは、明治17年に刊行された坪内逍遙の『自由の太刀余波鋭鋒』以降、シェイクスピアの原書訳の多くが浄瑠璃風の文体に傾いていく中で、『羅馬盛衰鑑』だけはその流れに従っていないという点である。訳者の一人小宮山天香によれば、それは次のような理由によるものであった（巻頭「例言」）。「凡我邦の俚俗に行はるゝ院本の文体は語詞鄙猥にして、此等の文を訳するに適はず。故に此文は必らずしも院本の文体に拘泥せず。間々謡曲物語等の体をも併用ひて訳出せり。」

「今日我が邦に行はるゝ演劇は大いに改良を要するものなりと云ふことは、既に一般の与論となりたるが如し。而して其の改良を要するの点に至りては、演劇改良会趣意書并に二、三新聞の社説に於て屢々陳べられたる所にて、大略之を尽せるが如し」と前置きした上で、改良を要する点については、なお曖昧な点が少なくないので私見を述べる、という趣旨のもの。シェイクスピアに関しては「シェーキスピーヤの作も排斥すべきものにあらずや」（41〜44頁）、「ハムレット」（49〜50頁）等の記述がある。後者の文例をあげると、「昔のハムレットと今日のハムレットはまるで違ひたる人の如し。我が邦と雖も、其の通り。同じ石川五右衛門でも、昔の石川五右衛門と今の石川五右衛門とは、実に雲泥の違ひなり。されば、昔の狂言でも、演じ方次第で今の人情に適する様に為す

ことも出来なければ、時代ものなればとて一概に馬鹿げたるものなり、旧幕時代の腐敗物なりとして排斥せむとするは、演劇の史を知らざる者なり」云々。

9月☆『劇場改良法』 無一庵無二

大阪出版会社

「逍遙の所説は一九年九月に『劇場改良法』と題して刊行され、また無一庵無二といふ匿名のもとに、『演劇改良論駁義』といふ冊子も十一月に出版された。」(河竹繁俊『新劇運動の黎明期』)

6月☆ [Iigo Kai]

The Student 1巻6号

この一文に、明治19年6月15日に小石川植物園内の建物で催された第32回「英語会」の詳細が記され、その行事の一つとしてシェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』の一部が演じられたとある。それを演じたのは、菊池大麓と和田垣謙三で、穂積、飯島、矢田部(良吉)他が補佐を勤めた。当日会場に集まったのは渡辺洪基東京帝大学長、フルベッキ夫妻らを含む百名近く。また当日は、J. M. Dixon, W. D. Coxら会員によるスコットの『湖上の麗人』などの朗読も行われた。「英語会」は明治14年に結成された、英文学に興味を懐く人々の親睦会。ロンドンの The Society of Japanese Students に加わっていたメンバーを中心に組織された。月1回の月例会を開き、使用する言葉はすべて英語であった。

10月★「葉武列士倭錦絵」 仮名垣魯文

東京絵入新聞 6日〜11月16日

「ハムレット(翻案)」

明治8年9月に『平仮名絵入新聞』に連載(3回かぎりまで中止)された「葉武列士」

を院本風に改変して世に出したものの。歌舞伎の「筋書」風の「葉武列土」が「操曲あやつり淨るり」風の「葉武列土倭錦絵」へと作り替えられていく状況に関しては本書・第一章「仮名垣魯文と二つの『ハムレット』」参照。

11月☆『演劇改良意見』 末松謙澄著 文学社

『ハムレット』に言及。

11月☆『演劇改良論駁義』 無一庵無二

「この無一庵というのは何人の匿名であるか。……実名を出したら、或は有名な人物であつたらうか。」(柳田『移入』)

12月★『シエキスピヤ筋書』 一名、西洋歌舞伎種本』 竹内余所次郎 博聞社発兌

〔リア王(ラム)〕

12月★『セキスピヤ物語』 品田太吉訳・出版

〔ハムレット リア王 ヴェロナの二紳士 マクベス ヴェニスベニスの商人(ラム)〕

一八八七(明治20)年

1月★「理想佳人伝」 無署名 女学雑誌 5日〜22日

〔リア王〕

1月★『仇結奇 乃赤繩西洋娘節用』 木下新三郎 誠之堂

〔ロミオとジュリエット〕

1月☆「文章三傑小伝」 絵入自由新聞 6日〜

〔シエークスピヤ、ミルトン、スコット〕(柳田泉『移入』による)

3月★『脚本ハ仏国 当世二人女壻』 学海居士戯編 秋濤外史原訳 鳳文館

3月☆『演劇史』 谷口政徳編述 「リア王（翻案）」

「セキスピア」 68頁 福地氏

4月★『偶評 明治新体詩歌選』 佐藤雄治編 津田市松

『新体詩抄』の訳詩の再録

6月★「カゼリン結婚奇話」 無署名 教育雑誌

「じゃじゃ馬馴らし」

6月☆「セクスピア伝」 暘城居士訳 絵入自由新聞 10日、52号

7月★『哀別 奇遇 誠之鏡』 赤司新三郎纂訳 品田太吉

「ベリクリーズ」

7月★「海外情譜」 無署名 大阪日報 21日～8月31日

「から騒ぎ」

8月★「三人の姫」 巖本善治訳 女学雑誌 27日～9月17日

「リア王」

8月★「転合笑話」 無署名 土陽新聞 30日～10月19日

「間違いの喜劇」

9月◇東京専門学校「英学部」の授業で、『マクベス』が講じられる。

東京専門学校（早稲田大学の前身）では、明治十五年の開校以来、「英語学科」の授業

で『ジュリアス・シーザー』が講読されていたが、この年になつてはじめて『マクベス』が講じられた。「英学部」の課程は4年で、その最上級の4年の後期に『マクベス』が取りあげられた。ミルトンの「コーマス」と『マクベス』の2書をあわせて、週に3時間当てられたとある。同じ4年の後期には、トマス・ドゥ・クインシーの「チャールズ・ラム論」(明治11年、東京大学出版)も読まれたと記されている。

10月★「情天恨地」ししりい物語」 架空道人

学芸世界 12月

「冬物語」

10月☆「歐洲演劇の話」 文科大学教授ルソー演説 古市公威通訳 読売新聞 16、27、30日

16日にはシェイクスピアの位置付け、27日にシェイクスピア伝、30日にロマンチズムの先駆としてのシェイクスピアからゲーテとシラーに及ぶ。

12月★「妙縁奇遇」 白金の指輪」 菅城子訳

土陽新聞 4日〜1月24日

「シンベリン」

12月★「仇多にし」 水鏡亭主人訳

日本之女学 23日、21年2月20日

「ロミオとジュリエット」

一八八八(明治21)年

1月★「豪華之夢」 鯖江小漁訳

学芸世界 5日〜3月15日

「アテネのタイモン」

3月★『自由之答 恩愛の継 豪傑一世鏡』 板倉興太郎訳

斯波二郎

「コリオレイナス(原書訳)」

板倉が、慶応義塾に在学した一五、六歳のときの訳で、「辞書と首引をし、かつ同輩の二三子にも助力を受けて」完成させたものだという（柳田泉「板倉興太郎伝」『明治初期翻訳文学の研究』）。折からの演劇改良の機運を受けて出版されたものとみえ、巻頭の「凡例」には、「演劇改良の補助ともならんかと訳者この春頃より」その翻訳に着手したとある。訳文は「皆の衆、暫らく足を留めて、己の言ふことを聴かつしやれ」と、一応の談話体になっている。

3月★『みなれぎを』 和田万吉戯訳・発行

聴雨堂

「終りよければすべてよし」

4月★「リア王の話」

羅馬字雑誌

「リア王」（柳田泉『移入』による）

5月★『鏡花水月』 渡辺治

集成社

「間違いの喜劇（原書訳）」

渡辺は、その序文のなかで、翻訳にあたっては、すべて原本のままを写し、趣向、順序、段落、章句においていっさい私意を交えなかったと述べている。日本で最初のシェイクスピア喜劇の原書訳。明治二十年代のシェイクスピアの翻訳のなかで最も注目される翻訳の一つ。

5月★『泰西奇談 女房持虎の巻』 仁田桂次郎訳

仁田桂次郎

「じゃじゃ馬馴らし（ラム）」

5月★「正本はむれツと」 山田美妙訳

以良都女 〳9月

「ハムレット」

5月★「四つの緒」 宇田川文海

大阪朝日新聞 13日〜7月12日

「お気に召すまま（翻案）」

5月☆「馬琴及シエークスピール」

朝野新聞（23日）

イーストレーキ博士「21年5月19日午後3時より国民英学会演説」。

6月★「『ジョン』王の演劇」

『ニユー・ナショナル』

第五リーダー直訳

渡辺松茂訳

積善館

「ジョン王（原書訳）」

「ニユー・ナショナル・リーダー」（一巻〜五巻）は、当時の英学生に最も受け入れら

れた英語教科書で、現在国会図書館に所蔵されている翻刻書は97種類に及ぶ。その5巻

（『第五リーダー』）にシエイクスピアの『ジョン王』の2幕1場の全文が、シエイクス

ピアの略伝とともに掲載されている。明治期最大のベストセラーとなった「ニユー・ナ

ショナル・リーダー」にそれが掲載されたということは、日本の英学生たちにかんりの

程度読まれていったものと思われる。ここに掲げた『第五リーダー直訳』というのは、

学生の自習を助けるために発行されたいわゆる虎の巻で、全文の訳文が掲げてある。こ

うした「直訳本」の発行点数も、教科書の翻刻書に劣らぬものがあり、「第五リーダー」

だけでも明治期に9種類のもものが刊行されている。本書はその最初の直訳本。

6月★「沙翁戯作 女学ものがたり」 是空子訳

女学雑誌

「原作不詳」

「針箱。此は同じ思ひの人も候ふものかな、其処に身を投げんずるは何人に候ぞ。／女

大学。今ま聞こゆるは松風か、左らざば狐狸妖怪の迷はしならん。南無阿、弥陀仏、南無ノ針箱。御待ち候へ、世をはかなみて消え入る人とこそ見侍る、妾わも同じ不運なれ、如何に、語らひて切めてもの、三途の友と成り申さん。」

6月☆「英国にシェークスピアなし」

時事新報 4日

「シェークスピア・ベークン説の紹介」（柳田泉『移入』による）

6月☆「セクスピア伝記」 B. B. B. 生稿

文苑英華 6号以下（柳田泉による）

7月★『一輪の牡丹花』 丸山平次郎

当籤堂

「ヴェニス商人」

7月★『夏木立』 山田武太郎（美妙）

金港堂

「籠の俘囚」（ザ、レイプ、オブ、ルウクリース）を含む。

7月☆「セクスピア作 渡辺治訳『鏡花水月』 在一居士 国民之友 25号付録 27〜29頁。

在一居士は、聖書の邦訳等で名高い高橋五郎（本名吾良）の別号。当時第一級の英語学者が行っているこの『鏡花水月』の評は、単なる書評の域を超えて、時代の水準をはるかに超えた高度な翻訳論となっている。注目すべきは、これが掲載された『国民之友』という雑誌である。同じその25号には二葉亭四迷の「あひびき」が、また、森田思軒の「随見録」が掲載されている。日本の近代文学の歯車を大きく前進させることになったこれらの翻訳作品に加えて、本格的な翻訳論がそこに掲載されていたことになると、この『国民之友』の25号という号は日本の翻訳文学史上忘れられない号ということになる。ともあれ高橋五郎の文例を以下に掲げると次のようなものであった。「此国の語にて最も美

なる者も、彼国の語に於ては或は然らざるあり。名作の直訳す可らざるは実に此に在り。詩文の名人にして、又能く他人の作物の精神に曉り入るの才智ある者にして始めて能く是の如き事業を成し得べし。彼の独逸人テエク氏、シレゲル氏の如きは、此困難なる事業に当たりて、驚くべくも、一種出色のシェークスピアルを書き得たり。名人のシェークスピアルを訳するは、大抵是の如くにして、徒に死文を守らず、原作者の精神を其訳する所の言語の上に活動勇躍せしむるを主とす。今、此翻訳鏡花水月を見るに、是れ彼が戯曲の中滑稽を以て有名なるゼ、コミデ、オヴ、エルロルズを訳出したる者と云ひて、文辞は幾分か淨瑠璃口調を雜へたる平常の談話体に書綴れり。余輩は之に毀誉の批評を加ふるを好まず。如何となれば、是れ固よりシェークスピアルの原作に追隨する者に非らず。又テエク氏等の訳書とも匹敵すべき者に非ずと雖も、又善く原本の大体を忠実に写し得て、ジユス井氏等が用ひし改善手段に倣はざれば也。彼の仏国学士ジユス井氏の『ハムレット』、或は『マクベツ』の如きはコル子一ユ、ラス井ン等の戯曲体に美はしく書綴りたれども、其順序結構に至りては、大にシェークスピアルの院本と異なり、到底同一物とは見倣し難し。ジユス井氏もし押韻の体を用ゐずして、モリエルの滑稽狂言ラバル（守銭奴）の文体に之を書きたらば、シェークスピアルの本色を一層精密に写すを得たるならん。……渡辺氏は此両端の間に立て、兎も角も遣てのけられれば、本書も亦、本書相応の価値ありと謂はざる可らず。」

8月★『泰西奇談 嵐の巻』 仁田桂次郎訳

仁田桂次郎

「あらし（ラム）」

8月☆ 「しえくすぴあ氏」

郵便報知新聞 19日（柳田泉『移入』による）

11月★ 『泰西奇談 智孟物語』 仁田桂次郎

西原喜一

「アテネのタイモン（ラム）」

11月★ 『幽霊』 井上勤訳

久野木信善

「ハムレット（ラム）」

12月★ 『汝所好』 宇田川文海

駈々堂本店

「お気に召すまま（翻案）」

同年5月～7月にかけて『大阪朝日新聞』に連載された「四つの緒」を改題のうえ、単行本にしたもの。「汝所好」と書いて「すきずき」と読ませる。明治23年発行の再版は、いわゆるボール表紙本で、表紙の彩色石版画には、樹木に何か書き付けている侍と、背後に二人の女性が描かれている。そのうちの一方は明らかに男性の姿を装った女性で、アーデンの森を舞台に繰り上げられるシェイクスピア喜劇の翻案ということが一目でわかる。劇を小説体に、時代を江戸に変えてはあるが、原作の筋をかなり忠実に再現した箇所もみられる。たとえば、「虚無道人」（メランコリー・ジェイクイズ）が「有田の山」（アーデンの森）で述べる有名な台詞はこういうもの。「此の世界は総て演劇の舞台にて、生まれ出る男女は総て俳優にて候ふ、或は出、或は入る、千態万状と其趣を異にすれども……」。著者の文海は欧文を解さなかつたようだから、誰か下訳者がいたものと思われる。

12月★ 「小説 活人形」 架空道人訳

明治文庫

〔冬物語〕

12月◇この年までに第一高等中学校にシェイクスピア全集が架蔵される。

この年12月に発行された第一高等中学校の『洋書目録』に記載されているシェイクスピア関係の原書は以下のとおり。

Works, edited, with a scrupulous revision of the text, by M. C. Clark, 1880.
Works, edited by H. N. Hudson, 1863. 11vols.

ちなみに、同じ月に発行された『第一高等中学校一覽』には、「一部第一年三之組(英)」のクラスの筆頭に夏目金之助(のちの漱石)の名前が見える。

一八八九(明治22)年

3月☆「作者身の上話(西キスピヤ)」 香夢楼録

文庫 18号以下

4月★「活人形」 架空道人訳

日本大家論集

〔冬物語〕 前年12月の同話の再録

4月☆「書目十種」

国民之友 48号付録

この『国民之友』が行った著名人の愛読書調べで、福地源一郎ら7名がシェイクスピアの名をあげている。英文学に関して最も愛読者の多かったのはシェイクスピアの7名、以下ディケンズとサッカレーが5名でそれに続く。具体的な作品名としては『ハムレット』をあげた者が1名、その他は皆、単にシェイクスピア全集等と記すだけで、作品名はあげていない。

8月★「オフェリアの歌」 SSS同人

国民之友

「ハムレット」

9月☆「シェーキスピヤカベークンカ」

哲学会雑誌 31号

10月☆「シェーキスピヤ翁ノ文字ヲ評ス」 暮秋生訳

しがらみ草紙 1号 37〜38頁

11月☆「ウイリアム・セーキスピア伝」

日本大家論集 30号

11月☆『実用教育新撰百科全書』第22編 園田来四郎編

博文館

「ウ井リヤム、セーキスピヤ―氏小伝」。全文3ページほどの略伝。文例をあげると、「博士デヨンソン、嘗てセーキスピヤ―ヲ評シテ曰ク、世ニ操觚者多シト雖ドモ、蓋シ氏ニ過グルモノナカルベシ。氏ハ実ニ天与ノ詩人ニシテ、其詩ハ以テ読者ヲシテ人情風俗ヲ映写スベキ適當ノ反射鏡タリシコトノ感想ヲ懐カシム」というもの。注目すべきは、そこに添えられているシェイクスピアの石版肖像画で、制作にあたったのは明治13年に薔薇楼から出版された『ガリヴァ―旅行記』の彩色石版画を制作した国文社。シェイクスピアの肖像画の移入史上注目される作品の一つ。

11月☆「シエクスピア作 磯辺弥一郎講述「人肉質入裁判法庭之場講義録」」 高橋五郎

国民之友 135号 36〜37頁。

一八九〇（明治23）年

1月☆「我国終にシエークスピヤ無からんや」 坪内逍遙

読売新聞 8日

シェイクスピアを出したエリザベス朝文学の発展経過と比較しながら、日本文壇の置かれていた状況を客観的に分析したきわめて興味深い記事。日本の文壇はいまようやく青年期にさしかかろうという時期にあり、その時期にいきなりシェイクスピアのような大

作家を期待するのは無理である。いまは未来のシェイクスピアを産み出すための基礎づくりに専念すべきではないか。逍遙のこうした考え方は、のちに『早稲田文学』（3号）で展開される翻訳文学をとおして日本文学の近代化に欠かせない文学・文章上の整備をおこなっていかうという考え方にもつながるもので、当時の文学界をリードする先導者の根底にあつた考え方として注目される。以下に、その核心部分の文例を引く。「英人ブルック、エリザベス文学の第二期を評して曰く、千五百八十年以後の英国は、喩へば、血気の青年の如し。当時の文字には少壯の原素充滿し、殊に詩は恋愛、荒唐を旨とし、想像をほしいまゝにせざるなし。然れども、其次の程度に至れば、英国の気格、稍々老成し、従前は題目の奇を求め、こゝかしこにさまよひし心も漸く専らに国家に注射し、愛国の詩歌盛に興り、歴史、院本、こもごも出づ。是れ英国文学の丁年時代也。扱、其次に至り、国人の思想更に内に向ひ、深く人生の批評に留意し主観的の著作盛んに出づ。シェークスピヤの晩年の作（悲劇）は此大勢に伴へるものなり云々と。今、我文学を見るに、批評に中る事、少しとせず。嗚呼、我国遂にシェークスピヤ無からんや。但、丁年の時代の今漸く来りつゝあるのもどかしきを奈何せん。今の物識の努は、みづからシェークスピヤとならんとせずして、世をして早く丁年とならしむるにあり。吾人、今の文壇に未だシェークスピヤ其人を見ず。しかれども、国をして丁年たらしむる力ある人の未だおのれを知らずして、みづから大詩人たらんとして、空しく名聞に駆らるゝを見る。嗚呼、渠等何ぞ奮つてシェークスピヤを作るの道を開かざる。全国人を老成ならしむることを力めざる。」

1月☆「西基斯比亜の伝」 逍遙軒訳 雅楽多 3号

清水紫蝶画「セキスピヤ翁の肖像及び寺院の遠景」あり。

4月★「副本テンペスト」 一筆楼小竹訳 女新聞

「あらし」(柳田泉『移入』による)

5月☆「JULIUS CAESAR」講義 桂堂学人 国民英学新誌 34〜37、43〜44号

桂堂学人は、おそらく、国民英学会(という英語学校)を明治21年にF・W・イーストレーキと設立した磯辺弥一郎であったと思われる。彼は、『ジュリアス・シーザー』(明治22年)や『リア王』(明治26年)などの講義を同英語学校で行っていたことが、その課程表により確認できる。坪内逍遙が『早稲田文学』に「マクベス評注」の連載を開始する一年数カ月も前にこうした原文にもとづく講義録が発行されていたことは注目されてよい。磯辺は、その後も『人肉質入裁判法庭之場講義録』(明治24年)や『英文学講義録』(同25年、1巻から3巻に「ジュリアス・シーザー」の講義を収録)を発行するなど、英語教育界にシェイクスピアの作品を浸透させることに貢献した。

7月★「三人令嬢」 条野採菊著 やまと新聞 30日

「リア王(翻案)」

9月☆「戯曲『ハムレット』の心理」 哲学雑誌 43号

12月★「三人令嬢」 条野伝平(採菊散人) 鈴木金輔編輯・発行

「リア王(翻案)」

12月★『世界百傑伝』第8編 北村三郎 野口竹次郎編集・発行

「じゃじゃ馬馴らし(ラム)」 「沙機斯比亞ノ小伝」 333〜337頁

一八九一(明治24)年

1月☆「文界底知らずの湖」 坪内逍遙

読売新聞 付録 1月1日

ほかに尾崎紅葉「伽羅もの語」、幸田露伴「真美人」の二編を収める。逍遙の論中にシエイクスピアを「底知らずの湖」に喩え、そのありようを文学における没理想と説くところがあり、これがのちに森□外とのいわゆる「没理想論争」へとつながる発端となった。

2月☆「英聖書の英語及び英文学に於ける影響」 ケデー DOSHISHA 文学会雑誌 40号

「シエイクスピアの聖書知識及び利用」の一文がある。

4月☆「読法を興さんとする趣意」 坪内逍遙 国民之友 115、116号

当時の日本劇壇は、作家がいくら骨を折って新しい脚本を世に問おうとしても、それを演じる真の俳優がないという未開の状態にあった。逍遙は、新たな朗読法を世に広めることによって、将来のシエイクスピア劇の上演に備えようとした。本論はその趣旨を説いたもの。この新たな読法を広めるための朗読会は、やがて明治30年代の「易風会」や「文芸協会」の試みへとつながっていく。一文の要旨を掲げると以下のとおり。「ドラマは元と俳優に伴ふべきものなり。然るに今や文園戯曲を興さんとする時に当りて汝ドラマを作るとも、俳優は之を演ぜざるべし(具にいへば、汝の作を有形にし解釈し説明する者絶へて無し)……我所謂朗読法の本願は人性研究にありと雖も、其第二の誓願は此欠乏を補うて未来のシエイクスピヤ、ギョオテの説明者となり、批評家となり、兼

て天命解釈の一助手とならんとするにあり」云々。同論は26年出版の『小羊漫言』に再録されている。

5月★『ロングマンズ氏 第五読本直訳』 大倉五郎訳

金刺源次

「あらし(ラム)」

6月◇北村透谷、坪内逍遙、横浜の「山手公会堂」で、外国人による『ハムレット』の上演を観る。

透谷の日記にはこうある。「六月一日 横浜にてシェークスピアの「ハムレット」を演ずるを聞きて行く、山手公会堂に於てありし。中々面白かりき。春のやに逢ふ」。(詳しくは色川大吉『北村透谷』『東京大学出版会、一九九四』)。同様に逍遙も、「内地で初めて観た外国俳優のシェークスピア劇の印象」(『明治文化発祥記念誌』大正13年)の中で次のように回想している。「外国の旅役者が横浜で沙翁劇を演じたことは明治廿四年以降には折々あつたやうだ。その頃はまだ彼の山の手のグレイチーと呼んだ小劇場すらもなかつたが、その前身の公会堂があつたので、それが臨時の劇場に適用された。：多分、明治廿八年頃でもあつたらう歟、米国の旅役者の一座が前記のグレイチー・ホールで、シェークスピア物を一週間、毎夜外題を取り換へて上演すると聞いて、観に往つた。……その一座の長は、ミルンといつて、ずんぐりした小柄の男で、普通の旅役者たるに過ぎなかつたが、：古い型に従つた演出であつただけに、私をして観た二三によつて他の二十を類推せしめるに足り、テキストを読む上に有利であつたのみならず、後年「□ニスの商人」や「ハムレット」を土肥、東儀、水口などの校友を指導して実演せしめる場合にも役に立つた。其際、邦人で観に往つてゐた者は、私の外には、「ハム

8月★「ハムレットの譚」
レット」の時には、たしか、僅かに一人。それは北村透谷であつた。」
少年の友

「ハムレット」(柳田泉『移入』による)

9月★「花の深山木」 条野採菊
やまと新聞

「オセロー (翻案)」

9月☆「シェークスピア并に氏の文学」 五洲逸人
国民之友 130号

10月☆「シェイクスピア脚本評注 緒言」 坪内逍遙訳
早稲田文学 1号

ここで逍遙は、『早稲田文学』の創刊に際し、シェイクスピアの「脚本評注」を開始する旨を予告している。そのなかに先の「底知らずの湖」に言及するこんな一文もみえる。
「予嘗てドラマの本体を底知らぬ湖に喩へしことありしが、近ごろドウデン氏の論文をみればシェイクスピアとギョオテとを大洋に比したるがあり、趣はやゝ異なれども同じ理ことわりに帰着すべしと信ぜらる」云々。

10月★「魔王来」 山田美妙訳
国民新聞 8日

「夏の夜の夢 (中のパックの唄)」

10月★『人肉質入裁判
法庭之場講義録』 磯辺弥一郎述
磯辺弥一郎

「ヴェニスの商人 (訳注)」

11月★「マクベス評注」 坪内逍遙
早稲田文学 3号 26年2月

「マクベス」

11月☆「シェークスピアの理想」 撫象子 (巖本善治)
女学雑誌 290号

トマス・カーライルの『英雄崇拜論』風のキリスト教的文学論を掲げる巖本善治は、明治22年、写実主義の立場に立つ内田魯庵と文学論を戦わせたことがある（「小説論略」『女学雑誌』177号）。その巖本が、坪内逍遙と森□外の「没理想論争」が起こったのを機に、再度、おのれの文学的立場を明確にしようとしたもの。次の文章を見れば、彼の理想主義的文学論がいずこに由来するものか、自ずと明らかになる。「シェイクスピアが理想は、最と大き^{おほ}やかかなりし。故に没理想なりしと云ふものあり。之より延いて様々の誤解を為すもの多きこと痛ましけれ。凡そ古今のヒーローに、理想の熾^{さか}んならざりけるものやある。若しありとせば、其人は夙^{はや}く聞えずなりしならん。シェイクスピアを挙て、ゾーラ一流の徒の如く言ひ棄つるに至ては、一個の大予言者を俗殺^{ぞくころれ}了するもの也。……カーライル、其英雄崇拜論中に云はく、苟くも智^さとくシェイクスピアを見たらんほどの人は、彼が亦一個の予言者たりしことを認定せずんばあらず（予言者とは大理想家の謂なり）、此人の眼中には、自然は実に神聖にてありきと。」

11月☆『英国文学史』 渋江保著

博文館

「第四章 シェイクスピア」 80〜103頁

一八九二（明治25）年

1月☆「道徳上に於けるシェクスピア」

女学雑誌 301号

前年11月の撫象子（巖本善治）の論を受けて、キリスト教の立場に立った理想主義的文学論を展開したもの。「道念浅くして敬虔厳肅の心根なき人は、シェクスピアを読とも、たゞ其皮膚を窺がひ見るに異ならず。其奥深き心底に触れ接せんこと、到底望む可きに

非ず。／シエクスピアが写したる人物は万民なり。シエクスピアが演じたる舞台は宇宙なり。左れど彼に理想なしと云はんや。彼はフホルスタツフにあらず。ヘンレー五世なり。余は此点に於て「撫象子」と意見を同ふす。」

1月☆「烏有先生に謝す」 坪内逍遙

早稲田文学 7号

『しがらみ艸紙』に烏有先生といふあり。精敏なる審美眼を開いて逍遙子が没理想の説を看破し、縦横弁析して、是非の極致を決せり。議論高遠、理到り、筆到れり。何者か先生が深藪に服せざらん。逍遙子三読して、自家が非を覚ること一にして足らず。就中、その用語例の浪みだりにして、我ひとり解し他人をして解せしむる能はざりしことを覺れり。……シエクスピヤを評して没理想なりといふや、シエクスピヤの全局を評して、しかいへりしにはあらず。シエクスピヤを評するに小理想の解釈の無要なる由を弁じたりしなれど、弁と理と双つながら到らざりしが故に、先生見て全局の評となせり。」

2月★『想夫恋』 竹葉散人

中村芳松

「シエイクスピアの幾つかの作品の翻案」

3月★『英文学講義録』1、2、3巻 磯辺弥一郎 国民英学会出版局 3・6・9月

「ジュリアス・シーザー（訳注）」

3月★「沙翁戯曲 ハムレット詳解」 村田祐治 日本英学新誌 56号

「ハムレット（訳注）」

3月☆「人肉質入裁判（磯辺氏訳）」 北村透谷

女学雑誌 310号

透谷とシェイクスピアとのかかわりを記すと、明治24年6月1日横浜山手公会堂にて「ハムレット」観劇、25年3月4日「テンペスト」読む、同月「ナイトのシヤーキスピア全集」購入等。

4月☆「没理想の由来」 坪内逍遙

早稲田文学 13号

「著者はしばしば造化に虚実の二面あることを説きて、時に単複の二語を用ひたり。所謂虚とは、□外君の所謂想到適ひ、所謂実とは、□外君の所謂実なり。蓋し著者はプラトーに従ひて、所謂実を顕象（幻影）とし、虚、即ち想、即ち理想をもて造化の実体としたればなり。さてまたシェイクスピアを評するには、恰も造化に於けるが如く、彼の作にも二面ありとし、一面を虚（理想的）とし、一面を実（顕象的）とし、所謂虚とはプラトニック、フヒロソフヒー（プラトーの哲理）と解釈せり。□外君がドラマの上を用ひらるゝ理想といふ語は、此著者がシェイクスピアの作に対して用ひたると同じ意なるか非か、われ実此点に於て□外君の意を会得しかねたり。」

6月★『幻影』 宮崎湖処子（八百吉）

春陽堂

「シェイクスピア作品翻案」

7月★「夏草」 島崎藤村訳

女学雑誌 9月

「ヴェーナスとアドーニス」

8月☆「新刊／『まぼろし』」

早稲田文学 21号

25年6月に出版された宮崎湖処子の『幻影』の書評。「本篇の脚色と人物とがマクベス、ハムレットの両劇より脱化し来れる跡歴々たるを看ても」云々。

9月☆「沙翁曲中の恋人」 城東生

女学雑誌 10月、327、329号

10月☆「沙翁時代英国劇場の有様」 お、た、(奥泰資)

早稲田文学 25号

「沙翁の出で、盛んに悲喜両劇を仕組みしエリザベス女皇の時代には、英国の劇場は木の粗末なる建物なりき。……此頃には道具立にて景色を見ずといふ工風はなく、只見物の目につきやすき処に太なる黒板をかけ之れに『某の森』『某の住宅』など白々と書き付けたりき。道具を用ふるに至りしは、王政復古の後、サル、ダブルユー、タヴェエルナントといふ人の伝授にはじまるといふ。」この文章は坪内逍遙の『梨園の落葉』（明治29年）に収録されているところから逍遙の文章と見られるが、そこには初出が明治26年3月となっていたり誤記が見られるところから、逍遙（ないしは出版者）の記憶違いということも考えられる。ともあれ初出はこの25年10月に間違いなく、署名も「お、た、」となっている。

10月☆「シエークスピヤの故園」 坪内逍遙

早稲田文学 25号

11月☆「沙翁曲中の淑女」 城東生

女学雑誌 331号 10、12頁

「シエークスピヤ翁は万能の詩人なり。或は云ふ底しらずの湖なりと。或は云ふ没理想家なりと。夫は吾れ等の知る所に非るも、兎に角に其筆は深く人情の奥底に達す。故に見る人、各々其の感を異にす。前に掲げしものは恋人としての観察、今掲ぐるものは単に淑女としての観察なり。共に相待つて、翁が写せし婦人の一端を見るを得んか。」と前置きして、ポーシア、ヘレナ、デズデモーナ、ハーマイオニ等の言葉に訳と評釈を加えている。

12月★『シエクスピア作 じゆりあす、しーざる講義』 大倉本澄 開新堂

〔原書講義〕

一八九三（明治26）年

1月★『英国七大家詩文集訳注』 香取春介訳注 金刺源次

〔ハムレット（ラム）〕

2月★『痘痕伝七郎』 糸野伝平（採菊散人） 博文館

〔オセロー（翻案）〕

2月☆「沙翁即倍根」 早稲田文学 33号

アメリカの雑誌に掲載されたシエクスピア即ちベイコン説を速報したもの。「エド井ン、リードは、この頃米国発兌の『エレナ』雑誌に於て沙翁の戯曲は全くベーコンの作なりとの説を論結し、氏は次号に於ていよいよ事実の審問を開く筈なりと云ふ」。

3月☆『英国文学史』 渋江保著 野口竹次郎

第四章「シエクスピア」 80〜103頁（24年11月初版）。

4月☆「沙翁の友情」 日本評論 49号

6月☆『小羊漫言』坪内逍遙著 有斐閣

「我国終にシエクスピヤ無からんや」 10〜17頁。

7月☆『万国人名辞書』 山田武太郎編著 博文館

「しええくすびいある」 上巻「西洋之部」 505〜513頁

7月☆「徳育者としてのシエクスピヤ」 独嘯子 評論 10号

8月☆「名優アルキングの『キング、リヤ』」 西蹊生 早稲田文学 45号
9月☆「英文学綱領」坪内逍遙 早稲田文学 48号

シェイクスピアの項まで。

11月☆*The Merchant of Venice*, with an introduction and notes by K. Deighton, Okazakiya, 1893.

日本の出版社（岡崎屋）から発行された Deigton 版の『ヴェニス商人』。Deigton 版のシェイクスピア作品はこのほかに『ジュリアス・シーザー』（開新堂、明治26年）、『冬物語』（富山房、同29年）、『ハムレット』（共益商社、同33年）が日本の出版社から発行されており、その多くは三版、四版と版を重ねているところから、明治二十年代以降、日本の教場に最も流布したシェイクスピアの原書版であったことがうかがえる。

一八九四（明治27）年

1月☆『泰西文学史』哲学館第7学年度正科講義録 南条文雄 哲学館

「シェイクスピア」 8頁

1月☆「ハムレット曲中のオフエリヤを論ず」 眠叟 女学雑誌 362号

シェイクスピアの作品に登場する女性の性格と運命について論じたもの。「試に沙翁が画ける女性を借り来りてハムレットに配せんか、デスデモナ、豈に家事を止めてハムレットが心中の苦痛を聞かんや。ポルシヤの如きは彼の性質を究めん事を勉めしならん。ジュリエットならば、彼れを憐れみしならん。ロザリンドは微笑を以て慰めもしたらん。ビートルスは笑ひ去りしなるべし。イサベルは共に論弁せん。ミランダに至りては、只に驚嘆するに止まりしならん。然れどもオフエリアは彼を恋ひ慕へり。心単純にして思

邪なく容易に情にからまる彼のオフェリアは実にハムレットを恋ひしなり。斯くの如きの少女、豈に能くハムレットを知らんや。彼女は、只如何にハムレットの宮中に高貴なる公子なるを驚嘆して、慕ひしのみ。此れ豈に自然にあらずや。」

2月★『欧米名家詩集』中巻 大和田建樹

博文館

「『人生七期』（『お気に召すまま』より）」

「鉄道唱歌」で有名な大和田の韻文訳。「おもしろや／浮世の舞台踏みわたる／役者々の人のかほ／七幕ごとに出で入りて／かはる役目は何々ぞ／乳母めのとの胸につまられて／泣くより外にすべもなき／序幕をはれば学校に／かよふ児童のをさな時／革囊かばんを背せなに負ひつれて／朝日に顔を照らさせて／いやいやながら今朝も又／蝸牛くわぎゅうのあゆみ進めゆく」。訳文の前にはシェイクスピアの略伝が添えられている。

3月☆『和漢泰西名家金言集』

自助楼主人編輯

鍾美館

「塞格斯基亞」の言葉が下巻167頁にある。

7月★「沙翁戯曲該撤一節」 明石居士訳

女学雑誌

「ジュリアス・シーザー」

7月☆「功過録としてのシェイクスピア」 坪内逍遙

早稲田文学 67号

8月★「悲劇魂迷月中刃」 阿波寺鳴門左衛門（岩野泡鳴）翻案 女学雑誌 10月

「ハムレット（翻案）」

岩野泡鳴の初期の作。ルビは付されていないが、「たまたまよう、げつちゆうのやいば」と読ませるものか。阿波寺鳴門左衛門は、泡鳴の別号。これが『ハムレット』の翻案で

あることは、金子筑水の『桂吾郎』を讀みて」（早稲田文学81号）に記された梗概等を
みても明らかである。文例を「二幕目（二）おなじく桂勉強の場」から引く。「本舞
台森邸内の一室、下手に窓、そとは高き杉の木、桂窓下の机によつて、ハムレットを開
らひたまゝ、おも入れ。床の間に一劔」……すくひ給ふ神ありと信じがたきこのからだ、
これも一とつのかたき。討つはやすが、しかし、考がへば考がへるほど、他人も他人
でなければ、われまたわれにあらず。懷疑はむねに一ぴきの虫あつて産み出すのか？め
がみ恋ひしたつたのは、このちりの形骸なるか？「書に目をそゞぐ」讀んでこゝに至た
れば、いつも讀み去りかねる。何にが、かゝる高尚なおそれ、恐怖に堪へて居るだらう？
「これを誦する。」

「死のか、死のまいか、一思案。／どち 貴ツとから、はげしき／世 の 矢だま 堪
へるの と、／自さつ なして この苦海／そむき去る と？」
あゝ、ハムレット、われも死は短刀一と刃にあり。

「だが、死んだあとで 一とつ、／帰いつて来た もの は 無い／冥途 の こと
が 気がゝり。」

9月☆『ダンテと沙翁』 カールライル著 蘭山居士訳述 吉岡書店發行

『英雄崇拜論』中の同箇所訳。

9月☆『英米文人伝』 大和田建樹著 博文館

「シェークスピア」 1〜9頁。

9月☆『シェークスピア』エドワード・ドウデン述 阪田典治抄訳 東京専門学校

「東京専門学校邦語文学科講義録」。同講義録には出版日時は記されていないが、早稲田大学演劇博物館所蔵の本には、明治27年9月に講演とあるとの由。高橋康也監修・佐々木隆編『シェイクスピア研究資料集成』別巻1による。

12月★『桂吾郎』 岩野泡鳴翻案 女学雑誌社

〔ハムレット（翻案）〕

27年8月から10月まで『女学雑誌』に掲載された「悲劇魂迷月中刃」を改題のうえ刊行したもの。

一八九五（明治28）年

1月☆「シュレーデルと沙翁劇の興行と」 北涯生 帝国文学 1巻1号 70〜75頁

2月☆「近松と沙翁」（雑報欄） 帝国文学 1巻2号 91〜92頁

2月☆『桂吾郎』を讀みて」 金子筑水 早稲田文学 81号

前年12月に刊行された岩野泡鳴の『桂吾郎』（『ハムレット』翻案、明治27年8月〜10月まで『女学雑誌』掲載）の評。シェイクスピア劇を模した作品をとくとき見かけるが、「其の歌はんとする思想は未熟、其の形は大概ね蕪雜、未だ以て見るに足るべきもの少し、今此の種の作を示さんため女学社出版の『桂吾郎』を評すべし」と前置きして、作品批判を展開している。冒頭に作品の骨子を掲げているので、それを以下に紹介する。「桂吾郎といふ哲学生めきたる壮年医士あり、又同人の奉職せる病院に上田浪子といふ心も姿も美しき看護婦あり、互に相思の仲なりしが……院長の怨恨（恋の叶はざる返報）にて毒害せらる。桂吾郎は之れがためにハムレット風の半狂乱となり、亡霊と誤りて許

嫁の乙女を殺す。又上田浪子を殺せし院長は十年前、吾郎の父を毒殺せし者。又吾郎は其の際、敵打ちの遺言をも受けたりし者。されば狂乱いよいよ募るに及びて、遂に其の讐の徒党を斬殺し、自身も亦、其の場に斃るゝといふ、これ一篇の骨子なり。」

2月☆「沙翁の事歴」 魯庵主人

二六新報 5日〜22日

「ミル及スペインサアと共に夙くより日本に知られしはシエークスピヤ即ち沙翁なり」との認識をもつて、日本におけるシエイクスピヤ移入の歴史を概観し、シエイクスピヤの事歴を紹介する。14回連載。

7月☆「エルシノアの白薔薇」 空花生訳

家庭雑誌 56号

英クラーク女史の「ハムレット」による「オフェリヤの少時」

10月★『訳解 英国七大家傑作集』卷二 河田清彦訳

文港堂

「ハムレット(ラム)」

10月★『豊島嵐』 福地桜痴翻案

春陽堂

「マクベス ハムレット(翻案)」

12月★「応仁革命結城譚」 竹柴賢二

歌舞伎新報 12月10日、20日

「ハムレット(翻案)」

一八九六(明治29)年

1月☆「沙翁研究家に与ふ」

帝国文学 2卷1号 115〜116頁

2月★「夏草」 島崎藤村訳

文学界 38号 3〜16頁

「ヴィーナスとアドーニス」

3月★「デンマルクの皇子 ハムレットの悲劇」 坪内逍遙訳 早稲田文学 5月

「ハムレット」

3月★『演劇 脚本 何桜彼桜銭の世の中』 勝彦蔵翻案 新実八郎兵衛

明治18年の脚本「何桜彼桜銭世中」のあらすじを記したものを。

3月☆「逍遙訳『ハムレット』の緒言」 梁川子 早稲田文学 2期6号

4月☆「『ハムレット』訳」(雑報欄) 帝国文学 2巻4号 115～116頁

逍遙訳『ハムレット』について。

9月☆『文学その折々』 坪内雄蔵著 春陽堂

『マクベス』評釈の緒言」 40～50頁。

11月☆『梨園の落葉』坪内雄蔵著 春陽堂

「シェークスピアの故国」 1～7頁、「沙翁時代英国劇場の有様」 60～62頁、「功過録

としてのシェークスピア」 238～257頁。

一八九七(明治30)年

1月☆「独逸の沙翁研究」「クノオ・フィシエルの『ハムレット解』」 帝国文学 3巻1号

2月☆「『ヴェニス商人』を読む」 竹翠 日本人 6月 37号～45号

6月★「マクベス」 坪内逍遙評釈 国学院雑誌 31年10月

「マクベス」

8月★「沙翁作「ハムレット」の一節」 坪内逍遙訳 外国語雑誌

「ハムレット」

10月▼山口定雄一座、三崎町の東京座で「人体肉質入裁判」を公演。

23日午前9時より開演。三幕もので、「日蓮大士真実伝」と同時上演。森田思軒の直系の孫である白石男也氏が所蔵していた資料のなかから見つかった辻番付による。その挿絵には、包丁を手にした老人が、散切り頭に紋付き羽織姿の男性に挑みかかろうとする姿が描かれている。タイトルには「にんにくしちいれさいばん」とルビが付られている。

11月☆「シエキスピヤ評伝」 鱸江漁史

中学新誌

一八九八（明治31）年

1月☆「沙翁生る」 浜田柴楼

少国民 10巻2号 11〜16頁

2月★「丁抹王子ハムレット」 梁川注釈

少年文集 8月

「ハムレット」

3月☆「セキスピヤ」 上村左川

文芸倶楽部 4巻3号

5月☆『英雄論』カーラエル著 土井林吉

春陽堂

「詩聖、ダンテ、セークスピア」 101〜145頁

6月☆「沙翁は「マクベス」「ハムレット」中に自己を描き出せる乎」 国民之友 370号 140〜141頁

11月☆「シエークスピヤ新論」 青柳有美 女学雑誌 467号 12〜14頁

一八九九（明治32）年

4月★「梅模様形見小袖」 中村福助

文芸倶楽部

「冬物語（翻案）」

8月★「オセロ」 戸沢姑射訳

太陽 10月

「オセロー」

8月★『美文』清風明月 島崎藤村 高松正道編

大学館

藤村訳「夏草」(「ヴィーナスとアドーニス」を含む)。

9月★『銷夏漫筆』 島文次郎 中学教育社編

中学教育社

「沙翁戯曲真夏の夜の夢」所収

9月☆「悲劇ハムレット」 じゅんびん

慶応義塾学報 11月、32号〜33号

「ハムレット」の梗概とエドワード・ドウデンの評釈紹介。

12月☆「シェークスピアル傑作の戯曲 マクベス」高橋五郎講解 新英語 3〜11号

「マクベス(注釈)」

一九〇〇(明治33)年

2月☆「沙翁と巢林子」 奥村梅臯

新声 3巻2号

2月☆『西洋賢哲小伝』 井上円了

哲学館

「セキスピア氏小伝」8頁

5月★『妖怪』 松庵生

中西屋書店

「ハムレット(ラム)」

6月☆『霓裳歌話』 武島又次郎(羽衣)著

博文館

「シェークスピアの文字」 128〜131頁

「世にありとある文人中シェークスピア程言語操縦の自在なるものはあらざらむ。こゝは二個の点より証することを得べきにて、則ち一は其用ゐたる言語の数の許多なると、

二は是等の言語を布置して無数の名言佳句を作りなしゝことゝ也。……通常の通信に要する文字はおほむね三千字位なりといふ。サツカレーの如き作家は五千の言語を用ゐ、ミルトンは之より増して七千字を用ゐたりきとや。而してシエークスピアは更に之より大にして実に二万一千字の多きを使用したりき。あはれシエークスピアは、かの崇高にしてためしなき大詩人ミルトンが其山岳の想をあらはすに用ゐたる言語よりもなほ三倍の多きを操ることを得たりし也。」

8月☆シエークスピアの西班牙語研究 鷄溪生抄訳 早稲田学報 43号 49〜52頁

10月☆『英雄崇拜論』カーライル著 住谷天来訳 警醒社書店

125〜180頁

一九〇一（明治34）年

2月☆『川上音二郎／欧米漫遊記』 金尾文淵堂

仮綴本 63頁＋附録18頁。写真多数掲載。

3月☆『シエークスピア』（世界歴史譚第二十一編） 中村可雄著 博文館

3月☆「沙翁梗概」 中島孤島 をんな 4月 13〜15、21〜25頁

伝記

4月▽『川上音二郎貞奴漫遊記』 金尾文淵堂

アメリカで『人肉質入裁判』を演じたときの記述がある（30丁）。

「アーヴキングの相棒になつて働いて居るのはエレンテリーといふ女優で、比較にやありませんが、日本でなら九女人くわにゅうにんです。此の兩人が始終取つ組んで遣つて居ますが、『ロ

ベスビヤー』と『人肉質入裁判』などが、最も得意ださうです。私共も一夜観に行まし

たが『質入裁判』の方は、以前から筋も知て居ますから、其仕草やコナシで以て、台詞の意味も大概理解できました。アーヴキングの高利貸にエレンテリーの弁護人です。日本芝居の演り方とは、無論変つて居りますが、台詞廻はしと云ひ、身振と云ひ、仕草と云ひ、分からぬ我々さへも只感に打たれて帰りました。帰つてからつくづく考へると、我々の狂言も『高德』や『道成寺』などの一点張りでは、鼻についてをかしく無い。何か変つた新狂言……と云つても外に無いから、コリヤー一番アーヴキングの向を張つて遣らう、私のアーヴキングお貞のエレンテリーで、『人肉質入裁判』を遣つて見やうといふ考が浮んだ。元より言葉が出来ないから原作は演られない、言葉が出来て原作通りに演つた処が、向ふは世界一の名優だから、足も取れる氣遣ひは無い。其処で此の狂言をスツカリ日本の事に直して、日本のシャイロツク(高利貸)と日本のポーシャ(弁護人)を見せて落ちを取つて遣らうと、斯う考へたのです。大胆不敵な訳です。」

6月☆『文学叢書』

英文学史』 坪内雄蔵著

東京専門学校出版部

第九章「シェイクスピア」 205〜218頁

7月▼東京の明治座において伊井蓉峰らが『該撒奇談』(坪内逍遙訳)を上演。

14日初日。「川上「音二郎」の留守中七月の十四日より明治座に於て伊井蓉峰、深沢恒造、福島清、河合武雄などが「教育演劇」と名うつて……シェイクスピア原作「該撒奇談」……を上演した。伊井蓉峰は中幕でアントニオに扮し深沢恒造が、シーザーに、福島清がブルタスに扮したのであつた」(長田秀雄『新劇の黎明』)

8月☆「戯曲該撒の話」 仰嶽醒民

歌舞伎 15号 27〜31頁

ロンドン「ヘイマアケット」座の一八九八年の「ジュリアス・シーザー」公演について。

9月☆『詩人と恋』 関露香著

岡崎屋書店

第八章「失恋の詩人」中に「シエーキスペーア」91頁。

9月☆「該撒奇談に就て」 畠山古瓶

歌舞伎 16号

本劇は、立憲政友会の幹部として力をふるった星亨の刺殺事件が上演の動機となつていたために、治安妨害にあたる時は即刻上演停止という条件付きのもとに許可が下りた。そのため、劇場には連日、日本橋署の署長と警部が交代でやってきて監視に当たつた。「議事堂の番付の下りたるは八方運動の末、治安妨害と認むる時は直様興行停止といふ条件付に候、毎日日本橋署の署長及警部等交替に正本を携へて見物いたし居候、為めにシイザアが自賛の台詞中に名句あるをも遺憾なく削られ候、又一人では星事件と紛らはしとて刺客を大勢遣ひし様御記し相成候へども、刺客の同志は原本によりてもブルタス以下都合八人有之候」。

11月☆「ユーゴーの観たる沙翁」 鶴浜生

慶応義塾学報 46号 40〜42頁

一九〇二（明治35）年

1月▽「明治三十四年の劇界」

役者 1号

『役者』は、伊井演劇社発行の雑誌。34年7月に伊井蓉峰一座が明治座で上演した『シイザル奇談』に言及（6〜7頁）。「明治座の盆興行は一番目に「塩原多助」で、中幕に「シイザル奇談」を演じた。明治座は是迄嘗て新俳優の足跡を印した事のない、比較的

保守的に其品位を保つてゐた処であつたのだが、爰に始めて盆興行を所つ事になり、同じ題目で菊五郎の演た事のある「塩原多助」と、今日まで類のない沙翁物を出したにも関はず、客足も多く、全都の注意を引く事を得たのは些か意を強うする処である。：シイザル奇談は星亨氏の横死が開演の動機となつたものであるが、兎に角今の事情出来得る丈沙翁の作為を損ぜぬ様に注意し、……突飛ながら敢て斯種の西洋劇に指を染めた勇氣を識者の寛量は嘉し、観者は煙に捲れた姿であつた。」

1月☆「英国現代の二名優」

英学新報 1巻4号 6頁

ヘンリー・アーヴィング、エレン・テリーの二人を似顔絵入りで紹介。テリー紹介の項に「Irvingをして今日の成功あらしめたる實に Terry の力多きに居る。彼女の得意芸は The Merchant of Venice, の Portia, Macbeth, の Lady Macbeth 等なり云々」。

1月☆「シェークスピアの名」(伝記) 朴齋主人

図書世界 14〜21頁

2月☆「沙翁の花園」

英学新報 1巻6号

「雑録」中の一文。

4月☆「沙翁作中のアントニーを論ず・本能主義と諸名士」

後藤宙外

新小説 5月 7巻4号〜5号

4月☆「Taming of the Shrew (Adaptation)」

英学新報 1巻12号

「これは Shakespeare の劇中にて有名な Taming of the Shrew の一部を取りて、我が英学生の文学会等にて、戯に演ずるに適するやう編者の改作したものなり」。表題に「Adapted from Shakespeare's Comedy for Japanese Audience」とある。

5月★『アリババと四十の盗賊』 河島敬蔵注釈 浜本明昇堂

「ハムレット（ラム・注釈）」 「英文学叢書第一編」。

5月☆「ハムレットと烏鷄国太子と」 観潮楼主人（森□外） 歌舞伎 24号 21～22頁

シェイクスピア作品と西遊記の類似について。

6月★『^{文学}英詩文評釈』 坪内雄蔵（逍遙） 東京専門学校出版部

「マクベス ハムレット」

6月☆『英詩文評釈』 坪内雄蔵著 東京専門学校出版部

「シェークスピアの劇詩」 377～598頁、「付録『ハムレット解題』」 1～11頁、「付録

悲劇ハムレット」 12～51頁。

6月☆『善魔哲学』 青柳有美著 文明堂

「シェークスピア新論」 87～93頁。

9月▼京都南座において福井茂兵衛一座が『闇と光』（高安月郊翻案）を上演。

17日。配役は古谷利右衛門（リア王）を村田正雄、三女蘭（コーデリア）を河合静夫。

高安月郊がこの翻案劇に込めたねらいは明治36年11月の「闇と光に就て」の項を参照。

9月★『三人令嬢 附、夏の夜の夢』 河島敬蔵 浜本明昇堂

「リア王 夏の夜の夢（ラム・注釈）」 「英文学叢書第三編」。

10月▼秋月桂太郎らが大阪朝日座で『紅葉御殿』（『ハムレット』）を上演。

1日。俳優は葉村清を秋月桂太郎が演じている。高橋康也・佐々木隆『シェイクスピア

研究資料集成』（別巻2）による。

11月☆「注釈／王笏と仁慈／シェイクスピア作」 英学新報 1巻24号

11月◇文部省により外国人名・地名の標準的「称へ方」が示される。
「ヴェニス」の商人 4幕1場（抜粋）の原文と注釈

文部省の命を受け坪井九馬三ら六名の学者が、師範学校、中学校、高等女学校程度の「地理及歴史教授用」の「外国地名」と「人名」の「称へ方」「書き方」の一覧表を公表する。そこに記載された四千余の地名・人名中にシェイクスピアの名があり、書き方は「シエクスピア」となっている。この発表を受けて、それらの「称へ方」「書き方」に略伝や地理的な説明を加えた「外国地名・人名」に関する「辞書」が矢継ぎ早に複数の出版社から発行された。

一九〇三（明治36）年

2月★「オセロ」 江見水蔭訳

文芸倶楽部

「オセロ」

2月☆「悲劇オセロに就いて」

文芸倶楽部 9巻3号 183〜192頁

2月▼東京の明治座において川上音二郎一座により『オセロ』（江見水蔭翻案）の上演が行われる。

11日初日。

2月▽「翻案 オセロ 六幕」 明治座

明治座における『オセロ』上演の際の辻番付。中央上段に「正劇」と記され、その下に英語で外国人観客のために『オセロ』上演の趣旨が書かれている。中央には「セーキスピヤ原本挿画抜粋」と題した石版画が配され、下段には全六幕の「登場者」名を記載。

配役は、室鷲郎（オセロ）川上音二郎、伊屋剛蔵（イアーゴ）高田実、勝芳雄（カシオ）藤沢浅二郎、鞆音（デズデモーナ）川上貞奴。「明治三十六年二月十一日午後一時三十分開幕」。

2月▽「正劇オセロ合評」一〜三 流星・一菜庵 東京日々新聞 13日〜15日

2月▽「明治座の「オセロ」一〜三 紫生 国民新聞 13日〜15日

2月▽「明治座の川上」 青々園 都新聞 14・17・19日

2月▽「明治座の『オセロ』 老桜癡人 読売新聞 17日

2月▽「明治座の正劇」一〜四 荷葉生 読売新聞 18・19・21・22日

2月▽「川上のオセロを観る」一〜九 松生 萬朝報 18日〜3月2日まで9回

2月▽「正劇の輸入に就て」 青陵 東京朝日新聞 20・22日

2月☆『外国地名辞書』 田中眞弓編 帝国出版協会

「シエクスピア いぎりす第一ノ戯曲作者」 231頁。同書は明治39年10月に東京神田の額瀨房太郎（大屋書房）が再刊している。

2月☆『泰西国歌』 英語青年社編集 英語青年社 15日

「Winter」の原文と注釈掲載、87〜88頁。

3月★『^磯 英文学講義録 改版第一巻』 磯辺弥一郎 国民英学会出版局

「ジュリアス・シーザー（抜粋）、ヴェニス商人（法廷の場）の訳注を含む」

3月★『沙翁物語 マクベス外二篇』 杉谷代水 富山房

「マクベス あらし 十二夜（ラム）」 「通俗世界文学第二編」。

3月▽「オセロ談／附改良の困難」 川上音二郎

小説 8年3巻

3月▽「オセロ談」 坪内逍遙

歌舞伎 34号

「今度のは時代物を世話も世話、生世話きせわに直した格ゆゑ、頭くぶで原作の雄大な質はきえてしまつた、是れも是非がないが、それが為あぶなくコメデーに流れそうになつてゐる」。以下、服部谷川の「櫓取考に就いて」まで『歌舞伎』34号に掲載された川上一座上演の「オセロ」に対する劇評特集記事。

3月▽「明治座の『オセロ』」 森□外

歌舞伎 34号

「SHAKESPEAREを本當に翻訳するといふことは、我國の文学者がこれから後には是非とも為し遂げねばならぬ一大事業だ。……翻訳といへば、制作に比べては何でもないことのように思つて居るらしい向もあるが、翻訳も翻訳による、制作も制作による。その日の日の出来心で新聞の小説を書くのも制作だとしてみれば、立派な書を立派に訳する功は、決しておぼろく踏むべきものではあるまい。SCHLEGELが韻文ながら、なるだけ原作どほりに書くことを努めた間にも、興に乗じて来たところでは、自作といつても好い処がある。……翻訳も眞の翻訳となると、再度の制作といつても好いやうなものになるのだ。さうして見れば、未來の我文学者の為すべき事業は大した骨折といふばかりではない、実に愉快な事業だといつて好からう。併しそれはそれ、これはこれで、眞の翻訳が出たからといつて、それが直に今の東京の劇場で興行せられるといふ訳にゆくまいから、江見君のやうな達者な人が今度の『オセロ』のやうな脚本を書かれるのも感謝すべきことに相違ない。」

3月▽『オセロ』の翻案と原作と」 上田敏

歌舞伎 34号

『オセロ』は沙翁晩年の円熟時代の作であつて、所謂女性結句を巧みに駆使した名文であるから、今回翻案の散文とは、全で往方が相違して居る。故に耳に訴へて非常の感動を起す白の妙が、この翻案に欠けて居て、看劇の後記憶に止まる名文句が、皆無であるのは如何にも残念である。今後西劇の翻案に従事する人は、原作の脚色を少し位変へても好いから、今日見物の趣味が許す程度に於て詩趣ある文句を挿入されん事を希望する。」

3月▽「川上の『オセロ』」 久保田米僊

歌舞伎 34号

「出来得るなれば『オセロ』に伴ふ、十六世紀の伊太利亞の場所と、その服装とを共に移し、筋だけを演るといふだけに留めないで、唯だ詞のみを日本に直して演じたならば、却つて見物の本位に適ふだらうと思ふ。」

3月▽『オセロ』の劇を見て」 依田学海

歌舞伎 34号

「それから殺す処も……元々伊屋剛蔵に煽られたので、汗拭が証拠としては薄弱で、手紙があるとか、密会を見たとかいふなら兎も角も、あの位な事で殺すのは、総督程の身上にしては激しすぎるので、一体が浅薄のやうだ。」

3月▽『オセロ』を採つた理由」 川上音二郎

歌舞伎 34号

『オセロ』を出した理由は……沙翁の有名な彼の四大悲劇の内でも一番壮士劇に適すると思つたから、それを好材料として採つたのです。」

3月▽「伊屋剛と『オセロ』の舞台に就いて」 高田実

歌舞伎 34号

「此役は川上君或は藤沢君が演たら好いと思ひます。世間の人が私にこれが適^{はま}つて居るといふのは、今日まで東京で敵役をして居たといふ処からだ、その敵役は伊屋剛と違つて、或目的の為に悪をしたといふ役であつたが、今度のはそれに反して、悪その物が目的なので、風采容貌が私には適^{はま}らないのです。」

3月▽「勝芳雄に就いて」 藤沢浅二郎 歌舞伎 34号

「自分で演り好く思ふ処は、丁度川上との今日の間柄が、総督に対する勝の様で、高田の伊屋に対しても丁度朋友である点です。」

3月▽「櫓取考に就いて」 服部谷川 歌舞伎 34号

3月▽「川上音二郎 附明治座の『オセロ』」 花房柳外 新声 (15日)

3月▽「文壇小観 オセロ」 文芸界 14号 (15日)

3月▽「新演劇、新俳優／(川上のオセロを観て)」 文芸界 14、15号

3月▽「^翻案 オセロ 六幕」 新京極 歌舞伎座

京都の歌舞伎座で『オセロ』が上演された際の辻番付。同年二月に明治座で上演されたときのものと同内容。ただ、上演の日付と会場名が異なる。「明治三十六年三月四日午後三時三十分開幕／興行日数七日間」。

3月☆『外国地名人名称方と書き方』 二松堂・文陽堂・魚住書店

「シェクスピア」とあるべき書き方・読み方を「シェクスピア」と誤記している。同類の西洋人名辞典中最も早いものの一つ。

3月☆『^磯辺 英文学講義録 改版第一巻』 磯辺弥一郎講述 国民英学会出版局

3月☆「沙翁戯曲」
「シェークスピアの小伝」 171〜176頁、「ジョンソン氏の沙翁論」 176〜192頁、「ミルトン氏の沙翁頌詩講義」 192〜197頁。
オセロ（注釈）
英学新報 2巻8、9号
文中の標題は「NOTES——オセロとイアゴー／沙翁作」。

4月▽『第四回講演会戯曲梗概』 東京外国語学校校友会

東京外国語学校における毎年恒例の演劇上演会のプログラム。「英語科第一、二、三年級演／ピレマスとチスビー／夏の夜の夢、抜粋」（5〜8頁）所収。「本校講演会の戯曲は何分種々な外国語学で演ずることで御座ひますから、多数なる来観諸君の中には御存じない言語もあり、従つて演ずる戯曲の筋が御分りにならない方もあることゝ存じまして、この梗概を編纂致しました……」

4月☆「培根沙翁論の要点を論ず」 島華水

帝国文学 百号記念 249〜257頁

島華水（文次郎）は『英国戯曲略史』（明治36年刊、東京帝国大学大学院時代の論考を基礎にしたもの）などの著書のある、当時の代表的エリザベス朝演劇の研究者。彼のシエクスピアーベイコン論の論法は次のとおり。「今茲に培根沙翁論を概評するに方りて、消極積極の両面に分ち、次第して観察を試みんと欲す。即ち先づ世に伝ふるが如く、フー井ツクシアの紳士シエクスピアは、果して沙翁劇の作者に非ざる乎を考へ、次に論者の主張するが如く、哲學家として聞え高きロードベーコンが、却て真正の劇詩家たる乎に考へ及ぼさんとす。是れ培根論の堡壘を観察するに最好の軍略なるべければ也。」

4月▽「時報 明治座のオセロ劇 イアゴーに関する誤解」

早稲田学报 （25日）

4月☆「沙翁劇詩目録」 上田敏 明星 卯歳4号 15〜20頁

5月★「喜劇 花菖蒲」 小栗風葉・藤浪一如訳 太陽 8月

「間違いの喜劇」

5月☆「沙翁書史」 上田敏 学燈 第7年臨時号 34〜106頁

わが国初のシェイクスピア文献に関する本格的書誌。項目を、刊本（四折本、二折本、詩集）、伝記、肖像、地誌、辞書、索引、言語、評釈、注解、翻訳、会報、出典、雑書、書誌の14項目に分類して、シェイクスピアの存命中の四折本以来の数多くの文献・資料を73頁にわたって掲載している。上田は、そうした「書史」を編む意義について、次のように力説している。「沙翁研究の事、吾文壇に漸く盛ならむとする今日に当り、参考書史を編纂して、江湖篤学の士に頒つは敢て無用の業にあらざる可し。此種の調査は労作多くして、耀華少しと雖、精緻なる研鑽に従ふ者の必ず留意すべき所にして、文芸の趣味を完全に鑑賞せしむとする一行程なり。」

5月☆『英国戯曲略史』島文次郎著 宝文館

「第四章 シェイクスピア」 82〜146頁

島文次郎は明治29年に東京帝国大学の英文学科を卒業。その後大学院に在籍してエリザベス朝演劇の研究に従事した。本書はその研究を基礎に書かれたもの。「本史は東京帝国大学院に在りて『エリザ』劇研鑽の傍、稿を成し、ものを今回更に節略して梓に上せる也。題して略史と云ふは即ち是に由る。」（巻頭「小引」より）

6月★『ゼ、マーチャント、オブ、ヴェニス』 土肥春曙（庸元） 服部書店

「川上一座上演」

6月▼東京の明治座において川上音二郎一座が『ヴェニス商人』（土肥春曙訳）を上演。

4日初日。配役は、シャイロックを川上音二郎、ポーシヤを貞奴。

6月▽「明治座の二番目」 青々園

都新聞 10日

「川上のシャイロック、先づ御誂通りの髻の好みもよく、只猶太人といふ人相が怪しいが、一体に喜劇肌な人で愛嬌がありすぎはせぬかと思つた割合には、憎みも利き、一番目の勝と比べると数段の出来だ……」。

6月▽「明治座の川上一座」上・下 りう生

東京日々新聞 10・11日

「第一場面を彼の地のに模して、人物の出入から、問答の順序まで、努めてアーヴィング等のやり方を真似た丈けあつて、全体に落着があつて、配列が面白い。」

7月▽「明治座の「マーチャント、オフ、ヴェニス」」 坪内逍遙 歌舞伎 38号 1〜5頁

「芸の上では腹は間違ひながらもヤハリ川上が一番見られました、併しあくまでも下卑た高利貸のシャイロックで、タカバ半道化に演じたといふ言伝へのドツゲット式のシャイロックで、彼の有名なマックリンや、エドモンド、キーンや、ブースや、今のア、キングなどの型とは似ても似つかぬものでありませう」。

7月▽「□ニスの商人」に就て」 北里龍堂 歌舞伎 38号 5〜10頁

7月▽「マアチャント、オフ、□ニス」に就て川上音二郎の談話」 との子

歌舞伎 38号 10〜17頁

7月◇島村抱月、ロンドンにおいてアーヴィングの『ヴェニス商人』を観る。

島村のヨーロッパ滞在中の文学的体験記である『滞欧文談』には次のような記述がある。
「去る七月半ば、俳優協会維持費募集の為右ダンテの座〔ドルアリー・レイン座〕にて、『マーチャント、オブ、□ニス』を一回限りの昼興行に出だし……倫敦中の座頭株を一
堂に集め、英国劇壇の偉観をつくし申候。……殊にアー□ング、エレン、テリーの初め
ての出、及び二人が顔を合す法廷の場の如きは、観呼喝采の声、大地のどよみを作るが
如く、四、五分間は俳優も手を止めて見物の方を眺め居り候」。

7月☆

『文部省
調査』

『外国人名字彙』 教授法研究会編

金昌堂

「シェクスピア」 164頁

8月★

『沙翁物語ハムレット及ヴェニス商人』 中島孤島 富山房

「ハムレット ヴェニスの商人（ラム）」 「通俗世界文学第六編」

8月☆

『人生観』 高橋五郎著

文栄閣

「シェークスピアの人生劇場論」 161頁。『我々の身材は夢の質のみ、我々の生命は一睡を以て団円を告ぐ』、シェークスピアは楽天的詩人なれども、喜観の裏におのづから一片の悲観を蔵す、是れシェークスピアが自然詩人 poet of nature たる所
以なりとす。如何となれば、変易遷流は、則ち実際の世相なれば也。」 本書は、出版後
わずか二ヶ月の間に7版を数えている。

8月▽

「横浜の川上一座」 山野芋作（長谷川伸）

歌舞伎 39号

8月▽

「ヴェニスの商人合評」 藤沢古雪・梅沢和軒

文芸界 2巻2号

8月▼

横浜の喜楽座において福井茂兵衛一座が『闇と光』（高安月郊翻案）を上演。

8日初日。今回は古谷利右衛門（リア王）を村田正雄に代わって福井茂兵衛が演じている。同劇の初演は、明治35年9月京都南座。

9月▽「福井一座の闇と光・（翻案キング、リア）」 山野芋作（長谷川伸） 歌舞伎 40号

高安月郊がこの翻案劇に込めたねらいは明治36年11月の「闇と光に就て」の項を参照。

芝居の内容にふれる重要な箇所は、本書の第四章に引用したので、ここでは冒頭の総評のみを掲げる。「此度の『闇と光』は大道具が不親切でしたから、興味の半は耗ひましたが、流石は高安月郊氏の作だけに、無趣味な人士を以て目されて居りました、俗臭の地横浜で、血、ピストル、強請、盗賊、立廻りより他に新劇は無いと思て居た見物に、此立派な芝居を見せて、それで満足を与へられたのは、僕も嬉しく存じました。」

10月★『沙翁／悲劇 ハムレット』 土肥春曙・山岸荷葉 富山房

川上音次郎興行権所有。

10月☆『偉人論』エマーソン著 大谷正信訳 大日本図書株式会社

「シェークスピア、即ち詩人」 296〜346頁

10月☆『外国地名人名辞典』 大倉書店

「シェクスピア」 176頁

11月▼東京の本郷座において川上音二郎一座が『ハムレット』（山岸荷葉・土肥春曙翻案）を上演。

2日初日、16日まで。川上はこの劇を上演するに当たって、本郷座と五箇条からなる契約を結ぶ。その内容は、第一に今回の『ハムレット』の上演は一般の人々が見物できるように夜興行とする、第二にチケットを一定の金額におさえ、下足代等付随的な料金は

請求しない、第三に場内での飲食を禁止する、第四に終了時間が夜遅くなることから観客用の車券を発売する、第五に舞台の道具立てを洋画家に依頼する、というものであった。現在の観劇の習慣からすればいずれも当然と思われればかりであるが、下足代・座布団代、さらには御茶屋の弁当代といった、日本の伝統的な観劇上の習わしからすると、これは大変な変革であった。

11月▽「改良せる芝居(本郷座の川上)」上・中・下 松生

萬朝報 5・8・9日

11月▽「本郷座の正劇」一〜四 白面子

読売新聞 7〜10日

「貞奴の織江は儲け役なりと雖も適当はまり役なり。座中織江に扮するもの彼女を除て他にあらべからず。只だオセロに於て失敗せし彼女は果して如何あるべきかとは、何人も危ぶみし所なり。然るに今回の織江は実に案外の結果を見て余も人も満足に堪へず。蓋し彼女は一の細工なく、一の巧みを弄する所なく、齒痒ゆきながらも極めて率直に自然に行きしなり。」「本郷座の正劇」(三)

11月▽「本郷座のハムレット」上・中・下 流星

東京日々新聞 7・8・10日

「青山墓地幽霊出現の場は、原作によると、ハムレットが亡父の霊より聞き得た一々を反覆する処で、最も困難な独ひとりせりふ白を長々と述ぶるのであるが、爰こゝにはそれを詰められるだけ簡単にして、而かも要領を失はなかつたは何より嬉しい。この場に於ける藤沢の年丸は、漸くその技倆を示す処で、随つて可なり骨も折れるが、本人の所謂葉村年丸としては申分無からう。そして巧みに電気の光線を応用し、幽霊かたみから月夜の光景を宛らのやうに見せたは、これもこの一座の特有として、洋行土産の紀念である。」「本郷座のハム

レット」(中)

11月▽「本郷座の『ハムレット』上・下　み、た、生　報知新聞　7・8日

11月▽「闇と光に就て」　高安月郊　歌舞伎　42号

『闇と光』(『リア王』翻案)は、明治のシェイクスピア劇の中で最も重要な作品の一つとみなされるもので、明治36年9月に京都の南座で初めて上演された。脚本は、福井茂兵衛の要請を受けて、高安月郊が書き下ろしたもので、翻訳ではなくて翻案というかたちを採った。それが人々の好尚に投じたこともあり、京都の南座以降、神戸、高松、大阪、横浜と全国で公演が重ねられ、明治36年10月(14日初日)には東京の国華座において上演されることになった。その公演に際して、月郊は、自らの翻案劇の趣旨を世間に対して次のように明らかにしている。月郊のシェイクスピア劇に対する理解の本質をうかがう上で見逃せない一文と思われるので、以下にそのさわりの部分を引用する。

「『リア王』は」オセロよりもマクベスよりも世界的である云はれるのは、古今にかゝらず、東西にかゝらずどこの人情にも能く合ふ所がある、これは今日の事にした方が最も適切と思ひました。仮に古代にしたら、第一領地を三人の娘に分配するといふ事が有り得べからざる事で、これが最も日本の封建制度と違ふ所です。しかし今の事にすると最後の領土回復の戦争になる所が困る。其外馬鹿の性格言語、これはどうしても日本に直らぬ。それからケントが姿を変へて主に付添ふとか、グロスタアの目をくり抜くとかいふ様な事はとも今日では出来ん。しかし翻訳で無く翻案である上は悉く原作に拠る要もないから、これを今の事として不都合の無い様にしました。つまり少数の沙翁

通に見せるより、多数に大悲劇の精神を示さうと思つたのです。「この劇は」人間の生活といふ事が最も著しく現はれて居て、それを道徳上両極端の三子と、天然の恐るべき暴風雨に对照させたからで、私々は寧ろ倫理と天地、此關係に至難の疑問を出した所に深く趣を認めます。」

11月▽『キンググレイヤ』の蘭子」 六花雄

歌舞伎 42号

東京の国華座において高安月郊脚本の『闇と光』が上演された際に、三女蘭（コーデリア）の役を演じた桜木雪夫が自らの役柄について語つたもの。

11月★「王女の旅」 押川春浪翻案

婦人界 2巻7号 21〜37頁

「シンベリン（ラム）」

『海底軍艦』など少年の読み物を著したことで名高い春浪が、「お伽話」と銘打って、ラム姉弟の物語を日本風の物語に翻案したもの。これは最近発見された資料の一つで、前文と本文の一部を紹介すると以下のとおり。「セキスピヤ物語のうち *Cymbeline*こそ、貴女方には趣味ある読物と存じ、題を王女の旅となし、女主人公 *Helen* をはじめ人々の名など成るべく日本風に翻案を試みました。／一 黄金の腕環／羅馬にはシーザル皇帝が権威を振つて居つた時代の事、英国を支配せるはシンブリン王とて、前の王妃は久しぶり以前に、一人の王女と二人の王子とを遺して世を去つた。」

11月★「ハムレットの原説」 巖谷小波

太陽 9巻13号 138〜150頁

「原ハムレット」

11月☆『外国地名人名辞典』 坂本健一著

宝文館

「シェクスピア」 496～497頁

11月☆「HAMLET」(巻頭グラビア) 英文新誌 1巻10号

「From the Gower Monument at Stratford」とある。

12月▽「本郷座の道具」 山本芳翠 歌舞伎 43号 30～34頁

本郷座の道具立ての筆を取った人物の苦心談。

12月▽「ハムレットに就て」 藤沢浅二郎 歌舞伎 43号 34～38頁

土肥・山岸翻案(川上一座公演)のハムレット役を引き受けた役者の稿

12月▽「本郷座のハムレット」 芹影 歌舞伎 43号 38～48頁

川上一座の改良演劇観劇評

12月▽「本郷座芸評」 真如女史 歌舞伎 43号 48～50頁

『ハムレット』評

12月▽『ハムレット』合評」 古城・楊柳城 文芸界 2巻7号

12月▽「本郷座のハムレット」 英文新誌 1巻11号 12～13頁

秋子と菊子が本郷座で見た川上一座の「ハムレット」の感想を述べあうという設定。英訳付き。そのほか「文壇雑話」欄に「Hamlet, は五磅」と「Hamlet, 」と題した記事あり。後者は「Japan Mail」誌に掲載された「TO HAMLET」と題する詩の転載。

一九〇四(明治37)年

1月☆「マクベスの幽霊に就て」 夏目金之助 帝国文学 10巻1号 55～73頁

1月☆「エリザベス朝戯曲に関する近業」(雑報) 帝国文学 10巻1号 278～281頁

近年五十年余に出版されたシェイクスピア集の概観と批評。

2月★「ハムレット物語」 佐藤楊柳（梗概） 女学世界 4巻2号 97～113頁

「ハムレット」

2月☆「沙翁は如何にして金を儲けたるか」 江口岳東 近事画報 2巻6号

シェイクスピアが大金を手に入れた方法について、「シドニー、リー氏の新沙翁伝から抜粋した」文章が「チャーチ、クオタリー雑誌」に紹介されていたのを、さらに日本の読者に紹介したもの。彼は「草稿料」と「俳優」のいわゆる「本業」で金銭を得たのであって、別に「卑劣」な方法で儲けたのではないという話。

3月★「コルデリア姫」 宮田素庵翻案 女学世界 4巻4号 199～207頁

「リア王」

4月☆「『ハムレット』の研究 ダウデンの『沙翁研究』の一節」 中島孤島

新小説 5月 9巻4号～5号

6月★『沙翁物語集』 小松武治（月陵） 日高有隣堂

「リア王 オセロー ロミオとジュリエット マクベス ハムレット お気に召すまま 十二夜 あらし ヴェニス商人 冬物語（以上ラムによる）」

10月★『海潮音』 上田敏 本郷書院

「花くらべ」（『冬物語』より） 所収

10月▽「正劇川上一派 ハムレット 九場」 京都 明治座

京都明治座における『ハムレット』（土肥春曙・山岸荷葉翻案）上演の際の辻番付。中

央上段に「正劇川上一派」と記され、その下に有名な劇中劇の一場面の石版画が配され、下段には「登場者」名を記載。配役は、葉村年丸（ハムレット）川上音二郎、堀尾折枝（オフィーリア）川上貞奴、葉村蔵人（クローディアス）木村周平、葉村八重子（ガートルード）守住月華。「明治三十七年十月一日より同七日まで」「午後六時開幕」。二番目の「浮かれ胡弓」（グリム兄弟原作・巖谷小波翻案）と同時上演。

11月★「夏の夜の夢」 小松月陵訳

白百合 1巻11号 355～358頁

「夏の夜の夢」

11月▽「京都に於ける川上の「ハムレット」評」 藤沢古雪 歌舞伎 55号

11月★「ロメオ、エンド、ジュリエット」 小山内薫翻案 歌舞伎 55号 付録1～46頁

「ロミオとジュリエット」 真砂座11月興行台本

11月▼東京の真砂座において伊井蓉峰一座が『ロメオ、エンド、ジュリエット』（小山内薫翻案）を上演。

5日初日。

12月▽「真砂座の『ロメオ、エンド、ジュリエット』」 帝国文学 10巻12号

脚本が完成してから舞台にかけられるまでの日数が少なく、不備な点が目立った。そのことが原因で、世の劇評家達から酷評を浴びせられることになったが、小山内が編集委員をつとめる『帝国文学』は、その間の事情を同情を込めて次のように伝えている。「ほんの筋だけ教へると云ふので口述した摘訳の筆記を座付の作者が直すだけの勇気が無く、訳者が直すだけの時日が無かつたために、其上演する事になつたのは寧ろ訳者の不

幸だ。然し何もこんな事で名をなさうとする訳者でもあるまいから、別に不幸と云ふ程の事もあるまいか。此間の事情を知らぬでも無いらしい劇評家達が名を大沙翁に借りて此修養中の訳者を罵つたのは残酷だ。」

12月▽「真砂座の霜月狂言」 真如女史 歌舞伎 56号 54〜62頁

小山内薫訳「ロメオ、エンド、ジュリエット」評

12月▽「劇評家諸先生に申上候」 ロメオ劇の摘訳者（小山内薫） 歌舞伎 56号 62〜68頁。

読売の白鳥、都の青々園、万朝報の鬼川、電報新聞の桜、春曙の批判を一つ一つ取り上げ答えたもの。

12月▽「真砂座の「ロメオ、エンド、ジュリエット」」 芹影 歌舞伎 56号 68〜78頁

一九〇五（明治38）年

2月★「花くらべ」 上田敏訳 白百合

「冬物語」

2月☆「沙翁の宗教」 愛天生 新人

2月▼大阪の朝日座において福井・喜多村一座が『マクベス』（島華水述・畠山古瓶脚色）を上演。

1日初日。

3月▽「朝日座の『マクベス』」 ヘゲタレ 歌舞伎 59号 8〜20頁

島華水述・畠山古瓶翻案『マクベス』の劇評。筆者の「ヘゲタレ」とは、「某大学に教鞭を執れる文学士某氏の匿名」とある。批評の一部を紹介すると、以下のとおり。「一体この度のマクベスの御翻案には、時代が何時頃で、場所が何処やら明瞭して居りませ

ん。成る程、番付にも韓国とは書いてあり、演じて居り升俳優自身も韓国、韓国と申し
て居り升から、韓国には相違なからうとは思ひ升ものゝ、韓国人に団野寛だんのくわんも可笑しけれ
ば、幕辺寿江雄まくべしゅうや、伴光ばんくわうや、幕辺照子まくべしゅうは、猶更可笑しからうと思はれ升。「時と言へ
ば何時頃いっで、国と言へば何処の国で、其の人物はと言へば、日本人か朝鮮人か知れぬ人
物が、日本現時の軍人の服を着けて、妖魔の言に耳を貸さうと言ふのですから、……マ
クベスよりも見物の方が茫然自失します」。

3月▽「マクベス夫人に就て」 喜多村緑郎

歌舞伎 59号 20～22頁

3月☆「沙翁悲劇『リヤ王』」 細越夏村

新潮 2巻3号 23～26頁

4月▽「『マクベス』興業」 平尾不孤

新小説 10巻4号 224～253頁

5月☆「沙翁研究（海外文壇瞥見）」 記者

太陽 11巻7号 145～147頁

5月☆「少年英文学譚 WILLIAM SHAKESPEARE」 内村達三郎

英学界 3巻2号 50～51頁

7月☆『梁川文集』 網島梁川著

日高有倫堂

「逍遙子訳『ハムレット』の緒言に擬して」

712～723頁

7月☆『荒村遺稿』 白柳武司編刊

松岡荒村『ハムレット』に於て狂女を憐れむ」

192～197頁

8月★「ヴィナスとアドニス」 まさき訳

帝国文学 39年2月

「ヴィーナスとアドーニス」

9月★『ハムレット』 戸沢姑射（正保）訳

大日本図書株式会社

「ハムレット（原書訳）」「沙翁全集一」

戸沢は浅野馮虚（和三郎）とともにシェイクスピア全集の刊行を企画し、原書10篇の翻訳を発表した。その「沙翁全集」第一巻目の本書に『「ハムレット」序』と題して、本全集刊行の動機を次のように記している。「訳者嘗て、故小泉八雲先生の講筵に列なりし時、先生諸生に勧めて曰く、汝が日常の言語を以て質朴に沙翁を翻訳せよと、其意蓋し沙翁の劇は其内容と思想とのみを以てするも尚ほ文壇の至宝と為すに足るべく、又かゝる深遠なる内容思想を表現せむと力むる中には、不知不識が国語の鍛錬、修辞文法の發達等を促すに至らむを予期せられしなり、訳者沙翁訳に志せしも実に先生の此言に基きしなり」。

9月★「ハムレット劇中の劇」 戸沢姑射訳

明星 巳歳9号 29～30頁

「ハムレット」

9月☆「シェークスピア」 内田魯庵

中学世界定期増刊（世界三十六文豪） 141～146頁

10月☆『世界文豪伝』（「秀才文壇臨時増刊」）

中内蝶二著 文光堂

「シェークスピア」 88～97頁。中村不折の描く口絵「シェークスピアの書齋」を掲載。

11月☆「文芸上の奇蹟」 後藤宙外

新小説 10巻11号 162～172頁

戸沢姑射訳「ハムレット」について論及

11月☆「アーヴィングの沙翁研究」 柴田流星

歌舞伎 57号 34～37頁

12月★「ロメオ、エンド、ジュリエット」 戸沢姑射訳

白百合 3巻2号 87～90頁

「ロミオとジュリエット」

12月★『ロメオ エンド ジュリエット』 戸沢姑射 大日本図書株式会社

〔ロミオとジュリエット（原書訳）〕「沙翁全集二」

一九〇六（明治39）年

1月◇坪内逍遙、島村抱月らとともに「文芸協会」を設立。以後、シェイクスピアやイプセンなどの劇の上演にあたる。

1月★「月あかき宵」 浅山たかし訳 文庫 30巻5号 364～366頁

〔ヴェニスの人〕

2月★「ヴェニスの商人」 浅野馮虚訳 白百合 3巻4号 214～218頁

〔ヴェニスの人〕

2月★『ヴェニスの商人』 浅野馮虚訳 大日本図書株式会社

〔ヴェニスの商人（原書訳）〕「沙翁全集三」

3月★『花の詩』 小原無絃訳 本郷書院

〔柳〕所収

4月★『海の詩』 小原無絃訳 文陽堂

〔海秋〕所収

4月☆「沙翁の墓に詣づるの記」 島村抱月 早稲田文学 4月之巻 1～28頁

4月☆「ハムレット及びドン・キホーテ」 ツルゲーネフ著 昇曙夢訳

太陽 5月、12巻5号、7号

5月★「獅威恙の怨霊」 文章世界

坪内逍遙訳『自由太刀余波鋭鋒』の一節

5月★『オセロ』 戸沢姑射

大日本図書株式会社

「オセロー（原書訳）」「沙翁全集四」

5月★「マクベツス」 加藤進訳（未完）

女鑑 16巻6号 114～117頁

「マクベス（ラムとは異なるリトルドもの）」

5月☆『今人古人』 中里介山著

隆文館

『今人古人』は介山の処女出版で、今日ほとんど目にする事のない稀覯本。西洋の偉人の逸話を集めた「前篇」のなかに「詩聖と馬丁（シエキスピーヤ）」（36頁）と題する次のような小文がある。「△伊太利のダンテ独逸のゲーテと共に世界の三詩聖と呼ばれる、沙翁も其の志を得ざりし時は遑々として衣食の奴隷たるを免れざりき。／△倫敦に在りし時グローブと呼ぶ劇場に雇はれて観客の乗馬の世話を勤めたる事ありき。／△カールライルをして、『英国は印度を捨つ可きか、沙翁を捨つ可きか二箇の疑問に逢着したる時如何に答ふ可きか。余輩は云はん印度を捨つるも断じて沙翁を捨つる可からず』と呼ばしめし大文豪も一たびは斯かる不遇の地に踏みし事ある也。」

6月☆『読書偶筆』 上田敏

丸善

「沙翁書誌」34～106頁。36年5月に『学燈』に掲載されたもの。

7月▼大阪の朝日座において福井茂兵衛らが『ヘンリー王』（岩崎舜花・小島孤舟翻案）を上演。

7日初日。

7月★「□ニスの商人」 坪内逍遙訳

早稲田文学 7号

「ヴェニス商人（原書訳）」

8月☆「翻訳難（沙翁の和訳二種を比較す）」 長谷川天溪 太陽 12巻11号 153〜158頁

浅野馮虚と坪内逍遙の「ヴェニス商人」の比較。

9月★『英詩の栞』 浦口文治訳注 英学新報社

『お気に召すまま』に収められている「Under the Green-Wood Tree」を「アーデンの歌」と題して韻文訳している。「常磐木陰トキハキハノカゲの／そのもとに／ともにもうちふし たのしくも、／たへなる鳥の そのふしに／声をあはせん 人や誰。／来れ来れ、 いざ来れ。／こゝにあはなん 仇としては／冬と嵐の 外ぞなき。

10月★『喜劇 新オセロ』 太郎冠者 彩雲閣

「オセロー（翻案）」

川上音二郎一座により、東京の明治座、京都の歌舞伎座などで上演された。最初『時事新報』に掲載されたもの。

10月▼東京の明治座において川上音二郎一座が『新オセロ』（太郎冠者作）を上演。

6日初日。

10月▽「正劇 喜劇 新オセロ 一幕」 新京極 歌舞伎座

京都の歌舞伎座で「新オセロ」（太郎冠者作）が川上音二郎一座により上演されたときの辻番付。メインの上演は「祖国」（ヴィクトリアン・サルドウ作・田口掬汀訳）で、これはその2番目。10月24日「午后正六時開場」、「日数七日間興行」。配役は、室鷺郎（オセロー）川上音二郎、室夫人頼音（デズデモーナ）川上貞奴、勝芳雄（カシオ）河

合武雄。「東京時事新報所載／太郎冠者作」とある。

10月☆『欧米書生旅行』 森次太郎著

博文館

「シェーキスピリア遺跡」 221～227頁

11月★『リア王』 戸沢姑射

大日本図書株式会社

「リア王（原書訳）」「沙翁全集五」

11月▼東京の歌舞伎座において文芸協会が「□ニスの商人」（坪内逍遙訳）を上演。

10日。

12月☆「ヴェエニスの商人」の評（文芸協会演芸大会における） 趣味 1巻7号

「外国語学校雇教師独逸人 アントン、フホエルベ」著

12月▽「文芸協会 演芸大会の評」 趣味 1巻7号

「外国語学校雇教師伊国人 ツエーザレ、スコラスチー」著

12月▽『ベニスの商人』の評（文芸協会演芸大会における） 趣味 1巻7号

「外国語学校雇教師英国人 メードレ」著

「今回の劇に於て法庭全体の光景は、充分なる興味を喚起するに足らなかつた。書記は感心に自若として居たが、書記とても人間であるもの、斯くの如き人世活劇の実況を見ては感動せざる事は六ヶ敷かろう。然るにアントニオの肉を斬り取らんとするを救はんとすためポーシャの之を遮ぎる一刹那、観客皆手に汗を握る思ひを為すに、書記は尚ほ平然たる事、銅像に異ならなかつた。」

12月▽『□ニスの商人』法庭の場の鬘と衣裳」 土肥春曙 歌舞伎 80号 27～28頁

文芸協会の公演に際し掲載されたもの

- 12月▽「片桐且元とアントニオに就て」 水口薇陽 歌舞伎 80号 28〜31頁
12月▽「木村重成とポオシヤ姫に就て」 土肥春曙 歌舞伎 80号 31〜35頁

「この法庭の場の人物の動作表情に就て、見物に來た或西洋人が、物足らぬ心地がしたと云はれたのを聞きました。が、西洋の人の目から見るとは、実に御尤千萬の事と思ひ升が、洋服を着て日本の白をいつては、自ら氷炭相容れぬ様な工合になりはしませんか。なぜなれば、元來西洋人は動作表情に富み、日本人はそれと反対であるから、如何に洋服を着ても自然と動作表情に不足して來る訳です。けれども原作通り西洋の詞で演つたならば、服装と詞とが相応して、自然と動作が出たかも知れません。」

- 12月▽「私のシャイロック」 東儀鉄笛 歌舞伎 80号 35〜36頁
12月▽「倫敦で見たア、ビングのシャイロック」 歌舞伎 80号 36〜37頁
12月▽「文芸協会」の演芸拝観記」 赤切符 歌舞伎 80号 40〜52頁

一九〇七（明治40）年

1月▼東京の本郷座において高田実らが『新ハムレット』（佐藤紅緑作）を上演。

2日初日。配役は、天城威人（ハムレット）高田実、天城元忠（同父）藤沢浅二郎、保科又太郎（レアード）喜多村緑郎、保科綾子（オフィーリア）木下吉之助。全七場。（本郷座辻番付による）

1月★『ヴェニス商人』 菅野徳助 奈倉次郎訳注 三省堂
『ヴェニス商人（ラム）』「青年英文学叢書第四編」

- 1月★「ヴェニス商人(名著梗概)」 井田甫 英学界 5巻1号 9〜10頁
- 1月☆『世界文学史』 橋本忠夫著 博文館
- 「英国戯曲の発展及シェイクスピア」 207〜218頁
- 2月◇小山内薫が、柳田国男、島崎藤村、田山花袋、岩野泡鳴、正宗白鳥らとともに「イブセン会」を結成。
- 2月☆「トルストイ翁の沙翁論を読む」 長谷川天溪 早稲田文学 14号
- 2月☆『哲学と人生』 朝永三十郎著 隆文館
- 「ドンキホーテ式とハムレット式」 220〜270頁
- 2月☆『英文学史 付録米国文学史』 浅野和二郎著 大日本図書株式会社
- 「第五編(五)沙翁」 184〜199頁
- 2月☆『英国文学史』 栗原基・藤沢周次共編 博文館
- 「沙翁」 115〜129頁
- 4月★『から騒ぎ』 戸沢姑射 大日本図書株式会社
- 「から騒ぎ(原書訳)」 「沙翁全集六」
- 5月★「沙翁戯曲の和訳」 英文新誌 沙翁号 4巻15、16合併
- 逍遙「マクベス」、姑射「ハムレット」の抄録、「ヘンリー四世の註釈」ほか。
- 5月☆「エリザベス朝」 Pancoast 著の註訳 英文新誌 沙翁号 4巻15、16合併号
- 5月☆『文芸瑣談』 坪内逍遙著 春陽堂
- 「明治座の『マーチャント・オブ・ベニス』」 203〜208頁、「川上のおセロをみて」 208

6月★「ハムレット」 坪内逍遙訳

早稲田文学 10月 19〜23号

「ハムレット」

6月▽「洋劇研究会に就て」 沢村宗之助

歌舞伎 86号 93〜96頁

東京座の「ジュリアス・シーザー」英語劇上演のこと。

6月▽「東京座洋劇見物」 田舎書生

歌舞伎 86号 97〜104頁

英語劇「ジュリアス・シーザー」観劇記

7月▼東京の真砂座において山崎長之輔一座が『ハムレット』（山岸荷葉・土肥春曙翻案）を上演。

31日。山岸・土肥翻案の『ハムレット』は、明治36年11月川上音二郎一座が東京の本郷座において初演。

7月▽『ハムレット／八軒長屋』 真砂座

7月31日より真砂座で『ハムレット』が上演されたときの「場割及役割」。土肥・山岸の翻案をもとにしたもので葉村年丸（ハムレット）を山崎長之輔が、折枝（オフィーリア）を若水美登里が演じている。村上浪六原作の「八軒長屋」と同時上演。

7月★『詩 担保之肉』 富樫寛次郎 有明堂

『ヴェニス商人』の韻文紹介

7月★『皇子ハムレット』 菅野徳助 奈倉次郎訳注 三省堂

「ハムレット（ラム）」「青年英文学叢書第十編」

7月☆『文談花談』 畔柳芥舟著 春陽堂

「沙翁研究家に与ふ」 36～37頁

7月▽「洋劇の研究」

歌舞伎 87号 20～24頁

英語劇「ジュリアス・シーザー」について

8月★『ジュリアス・シーザー』 戸沢姑射

大日本図書株式会社

「ジュリアス・シーザー（原書訳）」「沙翁全集七」

8月☆『俳優術及劇論』ヘンリー・アービング講演 松本君平訳 日就社

シェイクスピアへの言及多数

8月▽「日本で演ずるハムレット」 坪内逍遙

趣味 2巻8号

9月▽「真砂座の『ハムレット』」 山岸荷葉

歌舞伎 89号 19～25頁

荷葉・春曙翻案の『ハムレット』を、川上一座（本郷座、関西興行）、三崎座の女優一座（松本錦糸・岩井米花）、山崎長之輔一座（真砂座）が演じた際の月旦を、翻案者の荷葉自身が行った興味深い内容。「葉村公爵の霊。川上のは佳かつた。山本〔嘉一〕のは幽霊が芝居をするのには弱つた。錦糸代糸女八は神妙であつた。今度の鳥居〔梧楼〕は凄味があつて佳い。幽霊出現の仕掛も、最も簡略で、今度が一番可かつた。」「鳥居、島田〔新平〕、若水、山崎等の一座が大熱心は、かゝる大暑にも減げぬ大入大繁昌を占めて、数日間の日延をさへするに至つたといふ。」日本におけるシェイクスピアの受容のひとつの姿をここに見ることが出来る。

9月▽「日本の「ロメオとジュリエット」」 伊原青々園

新小説 12巻9号 88～92頁

10月☆「英国名優のハムレット」 小林愛雄

歌舞伎 90号 44～52頁

10月▽「日本で演ずるハムレット」 坪内逍遙

歌舞伎 90号 87頁

10月★『沙翁 悲劇 はむれつと』 山岸荷葉

春陽堂

「ハムレット」

10月▼東京の明治座において市川左団次一座が『はむれつと』（山岸荷葉翻案）を上演。

12月初日。

11月▽『はむれつと』上場の事」 山岸荷葉

歌舞伎 91号 111～116頁

「これは川上正劇派で書卸して、従来演古した『ハムレット』と事異り、名題も皮肉に、平仮名に書替へたのにも、お目止められて御一覽」

11月▽「明治座」

歌舞伎 91号 134～36頁

市川左団次一座の『はむれつと』の劇評。「一番目の『はむれつと』は山岸荷葉氏が興行者の囑に応じて、沙翁の原作を我邦の時代劇に翻案せられたもので、時は足利の中世、主人公は大名の跡取りとし、例の演劇の場を能舞台に倣めたなどは中々活いて居り、これを現代の事実らしくして新派劇で演じたものに比べると、確かに一步を進めたといつて宜しい。併しそれは粗筋の上の事で、彼我人情の相違は依然として宵壤も啻ならぬのだから、箇々の性格を發揮すべき長白は、原作に忠実なるだけ、それだけ登場人物の扮装とは不調和なものになり……時折不熟練な通訳の話を書く様な気するのは残念だ。」折枝姫は、奥庭では年丸の後影を見送つてちつと萎れた形が好い。狂乱は白と扮装の調和せぬ為か、哀れを感じる迄には行かなかつた。」

11月☆「古きハムレットと新しきハムレット」 スコット著 新思潮 2号 1～9頁

11月☆「シエークスピアと今日の劇壇」 シドニー・リイ著 新思潮 2巻 24〜40頁

11月☆「トルストイ対シエイクスピア」 坪内逍遙 早稲田文学 24巻 付録1〜9頁

11月▼東京の本郷座において文芸協会が『ハムレット』（坪内逍遙訳）を上演。

22日初日、25日まで。一番目・杉谷代水作「大極殿」、二番目・逍遙訳「ハムレット」、三番目・逍遙作「新曲浦島」

12月▽「文芸協会のハムレット」 門外漢 趣味 2巻12巻

「ハムレットに至りては従来我国に於て演ぜられた『ハムレット』の内最も称すべき出来栄である。第一の出来は第二幕二場目の演劇の場であらう。春曙子のハムレット王の『燈あかしをもてかなたへかなたへ』で退場のあと、王を追うて椅子に憑よつてより『亡霊のいうたことをとち萬両でも買はうわい』以下のハムレットは科白共に上乘の出来を取つた。」

12月▽「鎌子」と「ハムレット」の王妃」 水口薇陽 趣味 2巻12巻

12月▽「ハムレット」の道具」 久保田米僊 歌舞伎 92巻 61〜63頁

12月▽「梨園雜観／文芸協会演芸大会合評」 HME合評 帝国文学 13巻12巻

「坪内氏の訳は流石にお手に入つたものなれど、舞台の上へ乗つたのを見て、深く不足に感ずるのは、あまりに言葉がむずかしくて、唯聞いて居ればかりでは意味不明な個所が随分あつて、そのために痛切な感じを觀者に与へかねはせぬかと疑われることである。それから『なざしめ』などといふ能狂言から來たらしい言葉つかひがひどく耳についた。最後に今一つ特に自分の感興を殺いだのは、オフェリアの変死をその兄に告ぐる王妃の

言葉に、「斜に生ふる青柳が、白い葉裏を河水の鏡かはみづに映す岸近う、芝蘭の花や毛茛きんぽうげ、さては雛菊、いらぐさの、花のかづらをいたゞいて……」といふ、馬鹿に花やかな、長たらしい言葉である。如何に原文のまゝといつても、こんなところまで原文のまゝに訳する必要があるだらうか、沙翁時代の人と、現代の人とは思想が違ふ、かゝる文句は当時の人には耳ざわりでなかつたかもしれぬが、現代の聴衆には、痛切な感情をあたへかねぬ。」

12月★『沙翁物語十種』 小松武治（月陵）

博文館

「夏の夜の夢 間違いの喜劇 じゃじゃ馬馴らし から騒ぎ アテネのタイモン 終わりよければすべてよし シンペリーナ ヴェローナの二紳士 ペリクリーズ 尺には尺を（以上ラムによる）」

一九〇八（明治41）年

1月▽「土肥春曙氏『ハムレット』の型（第二）」 朗々生

歌舞伎 93号 17〜26頁

1月▽「本郷座の文芸協会大会」 しぐれ女

歌舞伎 93号 83〜86頁

『ハムレット』劇評

1月▽「文芸協会の「ハムレット」」 山岸荷葉

歌舞伎 93号 87〜90頁

1月▼東京の明治座において市川左団次一座が『□ニスの商人』（坪内逍遙訳）を上演。

14日初日。

1月▽『□ニスの商人』と花道と」 小山内薫

歌舞伎 93号 101〜103頁

イギリスの劇評家クレメント・スコットが歌舞伎の花道を見て驚いたことを紹介したも

の。明治座で「□ニスの商人」が演じられる前に書かれた文章で、直接の劇評ではない。

1月▽「ハムレット心談」 土肥春曙 文章世界 3巻1号

「逍遙」先生の指導を受けて、私共は初めてハムレット劇を演ずる端緒、いはゞまア方法を得たわけなのだ。方法といふのは、ハムレットの性格はどうか、つまりどういふ風な所を覘^{みら}つてその性格を演じたらば宜しいかと云ふことや、その他言葉の云廻し、動作、表情などに就て、これまで先生の研究せられた所に拠つて万事指導を仰いだ…」

1月☆「現実暴露の悲哀」 長谷川天溪 太陽 14巻1号

ハムレットとドン・キホーテについて

1月☆「ハムレットとドンキホーテとサンチョと三式の人物」 長谷川天溪 早稲田学報

1月☆「トルストイ伯の沙翁論に就いて」 松浦一 東亜の光 3巻1号〜8号

芸術と道徳の問題について詳細に論ず。

1月☆「沙翁の画像に就いて」 島文次郎 英学界 6巻1号 3頁

「沙翁の肖像画として第一の正確なるものにして、且其生存中に画かれたる唯一の原画、フラワー肖像」について紹介したもの。

2月▽^{文芸協会}「演芸部第二回大会に対する諸新聞雑誌の批評」 早稲田文学 27号

文芸協会の演劇 朝日新聞 竹の屋主人／文芸協会の試演 萬朝報 松井松葉^マ／本郷座の文芸協会 都新聞 青々園／文界私議 読売新聞 岩野泡鳴／文芸協会大会參觀に就ての所感 ホト、ギス 鳴雪 ほか

2月☆「パウ、メステルの扮したるシャイロック」 文章世界 3巻2号

巻頭グラビア写真

2月☆「シェイクスピアの肖像」

英学界 6巻3号 5頁

『英学界』6巻1号の「沙翁の画像に就いて」で島文次郎が紹介した肖像を掲載

3月☆『欧米記遊 二万三千里』 戸川秋骨著

服部書店

「沙翁劇」 207～223頁

4月☆『二十八人集』後編 田山録弥・加藤磯夫編

新潮社

西本翠蔭「沙翁の面影」 83～98頁、長谷川天溪「ハムレットの悲哀」 101～106頁。

5月▼大阪の中座において市川左団次一座が『ヴェニス商人』（坪内逍遙訳）を上演。

19日初日。同年1月の東京明治座の公演に続くもの。

5月▽「左団次劇の「ヴェニス」」 川上音二郎／同 貞奴合評 大阪毎日新聞 22・24・25日。

「左団次のシャイロツクについて言ひますと、左団次は独逸で此の劇を見たのださうです……私は倫敦でアービングのを見ました。何れ双方の型は違つて居ませうが、アービングのは見掛けは立派な紳士であつても悪が表面に現れて居ない。何うして彼様いふ人の口から彼様いふ憎い言が云へるかと思ふ処に一層の味ひがあるので……私が演る時には十分其の心得で勤めはしたのですが、何うも悪が露骨になるので、自ら芸の未熟を悔みました。処で左団次ですが、服装動作とも親しく見て来た丈あつて、兎角の評判を挟む余地がない。西洋の俳優が日本の詞で演つてゐると云つても決して差支へないと思ひます。」

5月★『御意のまゝ』 浅野馮虚

大日本図書株式会社

「お気に召すまま（原書訳）」「沙翁全集八」

6月☆『最新思想講話』 平山勝熊編

隆文館

坪内逍遙「ハムレット講話」 213～263頁

7月★「暴風雨物語」 無署名

福音新報（7月23日～8月20日）

「あらし（ラム）」

8月☆『シェークスピア言行録』 佐久間原編著

内外出版協会

「偉人研究 第四十七編」。内外出版協会が刊行した偉人叢書（全70篇）中の一篇。同叢書の他の「偉人研究」がすべて「言行録」の文字をともなっていた関係から本書もそうなっているが、実際はシェイクスピアの伝記と作品を中心にした関係から本書も「ストラットフォード行」以降は「全くジョージ・ブランドス氏のシェークスピア伝に拠った」とある。

10月★『行違ひ物語』 戸沢正保（姑射）

大日本図書株式会社

「間違いの喜劇（原書訳）」「沙翁全集九」

11月☆『英文学講話』 戸川秋骨著

東亜書房

「シェーキスピヤ」 14～16頁

12月★『王子の仇討』 中川柳涯

島鮮堂

「ハムレット」

一九〇九（明治42）年

1月☆「如何なる英書を当代の英語大家は愛読しまた学生に推薦せらるゝか」

当時の英語雑誌『英学界』が、日本の英語教育を担う「三〇〇有余名」の「英語大家」に行ったアンケート調査の結果を二十数ページにわたって掲載したものである。実際に回答を寄せたのは半数以下の一二〇名ほどであったが、当時の英語教育の実態を知る上でまたとない貴重な資料。具体的な質問の内容は、次の4点。

- (1) 貴下の最も愛読せらるゝ英米の作家並其作物の一二を御示し下され度候
 - (2) 貴下が御修学中最も多く益を得られたる英書二三を御示し下され度候
 - (3) 中学四五年程度の学生に推薦すべき英書二三を御示し下され度候
 - (4) 中学二三年程度の学生に推薦すべき英書二三を御示し下され度候
- 以上のうち(1)の質問にシェイクスピアの作品をあげた「英語大家」は15名。(2)は4名。一方(3)(4)の質問にシェイクスピアの作品をあげた「英語大家」はゼロであったが、ラムの『シェイクスピア物語』と回答した者が(3)の質問に対し2名いた。シェイクスピアの作品が中学生の推薦書としてあげられていないのは当然としても、全回答者の一割強の「英語大家」がその作品を愛読書としていたことは注目に値する。

1月★『オセロ』 菅野徳助 奈倉次郎訳注

三省堂

「オセロー(ラム)」 「青年英文学叢書第十六篇」

1月☆「沙翁の倫理観」 栗原基

開拓者 4巻1号 8〜12頁、2号 9〜12頁

1月☆「沙翁の墓碑銘 杉村楚人冠筆説明附」

英学界 7巻1号附録

『英学界』の附録。「額面用、本誌横四倍」とある。

3月★『悲劇オセロ』 菅野徳助

玄黄社

「オセロ」（原書・訳注）

3月★『山存稿後編』 外山正一（山） 外山岑作編 丸善

外山正一訳「西洋浄瑠璃ハムレット 靈験王子の仇討」を収録。

5月▼大阪朝日座において『響』（小島孤舟翻案『アテネのタイモン』）が上演される。

明治44年7月に大阪の田中書店から出版された『脚本 響』の作品末尾に「付記」として次のような上演記録が記されている。「此の脚本は最初大阪道頓堀朝日座に於て実川延二郎、中村成太郎、嵐吉三郎等の一座に書卸したる物にして、其後ち東京三崎座、真砂座、新富座、京都歌舞伎座、名古屋御園座、神戸大黒座、仙台の仙台座等各地の劇場にて新旧俳優の演じたる物なり。」内容は明治の「現代」に置き換えた翻案劇。

5月◇文芸協会演劇研究所の授業が開始される。

「演劇研究所設立の議を、相顧問の高田「早苗」も諒承したとなつたら、即座に実施するやう逍遙は性急に準備しはじめた。さうして三月中に計画を発表して研究生を募集し、四月中旬に試験の上、五月には授業開始をすることとなつた。」（河竹繁俊『新劇運動の黎明期』。第一期の研究生に松井須磨子らが出た。

5月★『作と評論』 坪内雄蔵著 早稲田大学出版部

「ベニスの商人法廷之場」所収

5月☆『作と評論』 坪内逍遙 早稲田大学出版部

「『ベニスの商人』法廷の場」 1～52頁、「日本で演ずる『ハムレット』」、「シヤイロ

- ツクとポオシヤ」 277～287頁、「シヤイロツク」 291～296頁、「オセロとハムレット」
 299～302頁、「ゾラと沙翁物」 302～303頁、「見せ物としての沙翁劇」 303～305頁
- 5月☆『改訂 英雄論』 カーライル著 土井晩翠訳 岡崎屋書店
 「ダンテ、及セークスピア」 123～178頁
- 6月☆『近代文芸の研究』 島村抱月 早稲田大学出版部
 「沙翁の墓に詣づるの記」 362～390頁
- 7月★『シェークスピア物語』 百嶋操 内外出版協会
 「あらし お気に召すまま 冬物語（以上ラムによる）」 「通俗文庫第三編」
- 7月☆『Merchant of Venice』 「シェークスピアの読方」 中外英字新聞 16巻7号
- 10月★「沙翁物語 暴風雨」 野口露生訳注 英学界 7巻13号 18～19頁
 「あらし（ラム）」 11号の続きとある。15、16号にも掲載あり。
- 11月★『十二夜』 浅野馮虚 大日本図書株式会社
 「十二夜（原書訳）」 「沙翁全集十」
- 11月▼小山内薫の自由劇場が東京の有楽座において第一回試演を挙行（27、28日）。
 演目は、イプセン作、鷗外訳『ジョン・ガブリエル・ボルクマン』、演出を小山内薫が
 担当した。「この公演は、わが国における近代演劇の誕生を待ちのぞんでいる青春の、
 圧倒的な支持をうけた」（講談社『日本近代文学大事典』）
- 12月★『ハムレット』 坪内雄蔵（逍遙） 早稲田大学出版部
 「ハムレット（原書訳）」

12月☆『欧州見物』 桜井隴村

丁未出版社

「沙翁誕生地」389〜403頁。「政治上の英国は亡ぶことがあつても、セキスピアの英国は永存すべしと申す。さればセキスピア……の誕生地で、又た終焉の地として崇めらるゝストラツトフオールド、オン、エヴオンの一小都会は、文学の霊場として、之れに礼賛するものも、好奇心で見物するものも、世界の四方より集り来りて、一年四、五万の多きを算すとかや、而して其過半数までは米国人なりとの事で、英国へ来て、一寸でも此靈地に足を入れなかつたら、国への土産話にならぬと思つてゐるのだ。」

12月☆『文芸百科全書』 早稲田文学社（代表島村瀧太郎） 隆文館

「シエークスピア」 444〜445頁、「シエークスピア及び同時代の脚本作者」 136〜137頁、
「悲劇ハムレット」（名劇解題） 193〜196頁、「リア王」（名劇解題） 196〜198頁、「悲劇マクベス」（名劇解題） 198〜199頁、「喜劇あらし」（名劇解題） 200〜202頁。

一九一〇（明治43）年

1月★「ロメオとジュリエット」 坪内逍遙訳

新小説

「ロミオとジュリエット（原書訳）」

1月☆「沙翁劇の翻訳について」 坪内雄蔵 東亜之光 5巻1号 165〜169頁

「新刊紹介 ハムレット」（坪内雄蔵訳）を併載（194頁）。

1月▼東京の本郷座において川上音二郎一座が『オセロ』（江見水陰翻案）を上演。

2日初日。初演は明治36年2月、東京の明治座。今回の「役割」は、室鷲郎（オセロー）川上音二郎、伊屋剛蔵（イアロー）佐藤歳三、勝芳雄（カシオ）藤沢浅二郎、鞘音（デ

ズデモーナ）川上貞奴ほか。六幕十場。（『沙翁原作／江見水蔭氏翻案 オセロ』「本郷座」による）

1月▽『沙翁江見水蔭氏翻案原作 オセロ』 本郷座 2日開場

「場割及役割」8頁＋「梗概」6頁。表紙には「六幕」とあるが、「場割」「梗概」は「第一」から「第十」までである。中内蝶二作「喜劇 箱根の正月」（一幕）と同時上演。観劇料は「一等」1円70銭、「四等」35銭。

2月▽『オセロ』に就いて 川上音二郎

歌舞伎 115号

「此の鷲郎と云ふ男は至極卑しい系統の素性も解らん……、一方の軀音は……貴族の娘で、而も此れが美人、先づ月に籠かごほど懸隔がある。其の間に恋をするのだから、日本では莫迦々々しい事で、……此れが演りにくい。」

3月★『イブセン社会劇 鏑木秀子』 土肥庸元訳

春陽堂

『ヴェニスの商人』の翻訳を併載。

3月★『人肉質入裁判』 吉岡向陽

春陽堂

『ヴェニスの商人』 児童書

5月▽「副官勝芳雄の型／○勝芳雄の研究」 翠浪記

演芸画報 4年5号

『オセロ』で勝芳雄を演じた藤沢浅二郎の談話の筆記。

5月☆『新訳 シェクスピア』 笹山準一著

精華堂

「沙翁の生涯」 111頁、「沙翁の作物」

112～201頁、ほか。

5月☆「二つの道 ハムレットとヘダ・カブラーについて」 有島武郎 白樺 1巻2号

5月☆「懐疑と徹底」 相馬御風 早稲田文学 54号

ハムレットの懐疑を主題として論ず。

6月☆『東西名士の修養』 中村徳助 菊地屋書店

「シェークスピア」 297～298頁

6月☆『近松傑作集』 1巻 早稲田大学出版部

「近松とシェークスピア」 104～115頁

7月☆『ハムレット劇研究』 平田元吉著 富山房

「クーノオ・フィツシエルの書は、予が最初に精読せし該劇の評釈なるを以て、従て自然に最も多く其感化を蒙り、特に第二章ハムレットの性格を論ぜる章は時々其見に従ひ、第三章ハムレットの独語の考察はまた氏に倣へり。」

8月☆「も一度「二つの道」に就て」 有島武郎 白樺 1巻5号

8月☆「オセロとハムレットの型（活動写真に映じたる）」 林翠浪 演芸画報 4巻8号、100～104頁

「ハムレット」のみで「オセロ」に関する記事は見当たらない。

9月★『ロミオとジュリエット』 坪内雄蔵（逍遙） 早稲田大学出版部

「ロミオとジュリエット（原書訳）」

9月☆「シェークスピアの遺言状」 小室興 学生文芸 80～85頁

10月★「真夏の夜の夢の間劇」 浦瀬白雨 帝国文学

「夏の夜の夢」

10月☆「マクベスの城の真相」 M生 劇と詩 1号 98～100頁

「八月のメルキュール・ド・フランスより」と副題がついている。

11月★『ロメオとジュリエット』 菅野徳助 奈倉次郎訳註 三省堂

「ロミオとジュリエット（ラム）」「青年英文学叢書第十八篇」

11月☆「新刊紹介 ロミオとジュリエット（坪内逍遙氏訳）」 歌舞伎 125号 126頁

11月☆「ロミオとジュリエットに就て」 川田順 心の花 14巻11号

一九一一年（明治44）年

1月▽『名優当り芸 芝居の型』 林翠浪編 磯部甲陽堂

藤沢浅二郎「副官勝芳雄の型」 211〜229頁

1月☆「坪内博士のハムレットを読む」 深甫 東洋時論 2巻1号

2月◇文芸協会が組織を一変し、劇団を中心とした新たな活動に踏み出す（「文芸協会組織一新の趣意」）。

3月☆『影と声』 阿部次郎他編 春陽堂

森田草平「ハムレットとリチャード二世」

4月★『オセロー』 坪内雄蔵（逍遙） 早稲田大学出版部

「オセロー（原書訳）」

4月☆「ハムレットの進化」 坪内逍遙 新日本 1巻1号 126〜129頁

「文芸協会で此の度「ハムレット」を演ずるに当つては、僕は出来るだけ沙翁の本意に依従しようと力めた、而も人は到底自分自身を尺度とするものであるから他から見られ
たなら僕の「ハムレット」で沙翁の「ハムレット」で無いかも知れぬ。よし僕の解は如何

あらうと、土肥春曙氏が之に扮するに及んでは自ら又別様の「ハムレット」となるかも知れぬ。」

4月▼東京の帝国劇場において伊井蓉峰らが『最愛の妻』（松居松葉翻案『じゃじゃ馬馴らし』）を上演。

14日初日。伯爵常磐田哲太郎（ペトルーキオ）を伊井蓉峰、常磐田伯爵夫人勝枝（カタリーナ）を河合武雄が演じた。（以上、『帝国劇場／第二回興行 絵本筋書』『坂本俊一編集・発行』による）

4月▽「喜／劇 最愛の妻」『帝国劇場／第二回興行 絵本筋書』坂本俊一編集・発行

帝国劇場における「第二回興行」（松葉が『歌舞伎』に掲載した一文には「今度帝国劇場の開場式に上場された」とある）の絵入り「筋書」。「椿姫」（デュマ・フィス原作。全5幕）、「喜／劇 最愛の妻」（シェイクスピア原作「じゃじゃ馬馴らし」。全2幕）の二本立て。ともに松居松葉による翻案。4月14日午後5時「開場」。「大森八景園結婚披露」。「鎌倉常磐田別邸」の二場面からなり、前者冒頭の筋書きは以下のとおり。「梅咲く春の始の暖き日、大森八景園には伯爵常磐田哲太郎と男爵滑川英二の令嬢勝枝との結婚披露の園遊会あり。京都法科大学教授博士東政雄、伯と連立ち出で来り。勝枝は華族女学校時代に夜叉令嬢と評判を取りたる程の慥悍獰猛の御転婆なれば、この結婚は断然中止せよと反対を唱ふれど、伯は其事は我に一任せよとて聴かず。爰へ勝枝は書生に無礼ありたりとて、耳を捉へて出来り。散々に打擲す。」

5月▽『椿姫』の上場に就て」 松居松葉

演芸画報

『奸婦馴らし』の一節を借用し、『最愛の妻』と云ふのを作らへました」。詳しくは佐々木昌子「シェイクスピア『じゃじゃ馬馴らし』の変容」『比較文学』第二十八卷（一九八五年）参照。

5月▽「喜劇『最愛の妻』」 松居松葉

歌舞伎 131号

「一時間か一時間半位の見当で演じ得べき脚本をと云ふ注文を受けたので、はじめは、^{ほか}外の物をかくつもりでしたが、登場俳優が京阪に別れて居て、稽古の時間が殆ど無いといふ事が分かったので、いつそ『テーマング、オブ、ゼ、シュリウ』なら、主なる女の役は」

5月☆「欧米名優のハムレット」 土肥春曙

新小説 16巻5号 130～136頁

5月☆「舞台上のハムレット劇」 迷羊生

慶応義塾学報 166号

5月☆「ハムレットの二重性格」 柴田柴庵

日本及日本人 557号 78～80頁

5月☆「ハムレット」に就いて」 坪内逍遙

歌舞伎 131号 26～29頁

シェイクスピアが『ハムレット』を書いた時代について。

5月▽「帝国劇場にて演ずる「ハムレット」について」 坪内逍遙 早稲田文学 66号

5月▽「ハムレットに就いて」 土肥春曙 早稲田文学 66号

5月▼東京の帝国劇場において文芸協会が『ハムレット』（坪内逍遙翻訳・並びに指導）を上演。

20日初日、7日間。

5月▽『文芸協会演劇ハムレット絵本筋書』 坂本俊一編集・発行

文芸協会が帝国劇場で『ハムレット』を上演したときの絵入り筋書き。上演期間は5月

20日から7日間。5幕12場もので、俳優はクロード・ディアス、東儀季治、ハムレット、土肥庸元、ガートルード、上山浦路子、オフィリア、松井須磨子等。中に「オフィリアの歌」と「墓堀男の歌」の楽譜が挿入されている。観劇料は特等3円、一等2円、二等1円20銭、三等70銭、四等35銭。冒頭に「坪内逍遙氏訳並ニ指導」とある。冒頭の一文は以下のとおり。「○亡霊出現の場 武官バーナード、マーセラスの二人この両三夜此高台にて怪しき幻影の現るゝを今宵もしやと若き学者ホレーシオをひて来り待つに果して現るゝ幻影、先頃崩御ありし先王の姿にその儘なるに声かくれば消え失する」云々。全部で20頁ほどの小冊子。巻末に帝国劇場の「座席一覽表」を掲載。

5月▽「文芸協会のハムレット」〔口絵〕

太陽 17巻8号

5月▽「帝国劇場沙翁劇」

時事新報 20日

『ハムレット』が上演されるに先立って18日に記者が楽屋を訪れて逍遙の話聞いたもの。

5月▽「ハムレット劇初日」

時事新報 21日

5月▽「ハムレットを観る」 静雨

読売新聞 22日

「今回の企（くわだて）で女優問題に大なる解釈を与へた様に思ふ、オフキリヤに扮する松居須磨子や上山浦路子のガートルードなどは立派に成功して居る、殊にオフキリヤの狂乱の唱歌に到つては在来の歌舞伎の女形では到底あれだけの効果は収め得られまいと思ふ」。

5月▽「ハムレット」所感」

東京日日新聞 22日

「劇場に這入って第一に感じたのは観客のうちに芸妓(げいしや)が殆んど居ない事で真面目な観客が多数であるといふ事だ」。

5月▽「文芸協会 ハムレット劇評」 中村生

日曜画報 1巻22号 28日

5月▽「ハムレット雑記」 XYZ

日曜画報 1巻22号 28日

5月▽「ハムレット劇上場所感」 金子筑水

東京日日新聞 30日

5月▽「ハムレット劇所感」 栗原古城

東京日日新聞 31日

6月★『ハムレット物語』 相馬御風

富山房

「ハムレット」。『ハムレット』のストーリーを会話中心にまとめたもの。「坪内博士聞」

とある。

6月▽『ハムレット』の舞台稽古」 時雨女

歌舞伎 132号 40〜41頁

6月☆「活動写真の『ハムレット』」 吉山旭光

歌舞伎 132号 73〜85頁

昨年春、神田錦輝館で上映。

6月▽「私のハムレットの役」 土肥春曙

歌舞伎 132号 85〜88頁

本郷座の試演。

6月▽『ハムレット』の初日」 青々園

歌舞伎 132号 88〜89頁

6月▽「坪内博士と「ハムレット」」上・下 漱石

東京朝日新聞 5・6日

大阪朝日新聞 6・7日

6月▽「ハムレット劇見物記」 みづうみびと

早稲田文学 67号

6月▽「ハムレット見学」 柴田柴庵

日本及日本人 560号 81〜85頁

6月▽「帝国劇場の『ハムレット』」 KN 生

文章世界 6巻8号

7月▽「ハムレット」 長白山

演芸画報 5巻7号

「六月帝国劇場文芸協会第一回公演」

7月★『ハムレット』 高野斑山

春陽堂

「ハムレット（ラム）」「家庭お伽文庫第七篇」

7月★『響』 小島孤舟

田中書店

「アテネのタイモン（翻案）」

7月▽「劇団時事」 一記者

歌舞伎 133号 117頁

「文芸協会の「ハムレット」は7日間平均91パーセントの入りであったといふ。帝国劇場はじまつて此のかた、事実に於いて此れほど入つた興業は無かつたらうとおもふ。」

7月▽「帝国劇場」

『ハムレット』興行談」 坪内博士

演芸画報 5巻7号

「僕等の今度の興行を社会の一部には冷笑軽侮の態度を以つて遇する人もあるが、又一方には熱心に同感して呉れられる人もあつて、種々の後援会を組織して盛んに来観せられた為、七日の興行中一日は全くの満員、其他も最も少い日が九歩がたの入りと云ふ盛況で、やつと昨日『楽』になつた。」

7月▽「ハムレット劇を観るの記」

文章世界 6巻10号

7月▽「『ハムレット』を観て」 水口薇陽

演芸画報 5年7号

7月☆『白楊』（ハムレット号） 田村菊次郎編

8月▽『切抜帳より』 夏目漱石

春陽堂

「逍遙博士と『ハムレット』」 355～367頁

8月☆『英文学史大観』 船橋雄

青山学院

「エリザベス朝の文学」(35～57頁)中に「ウイリアム、シエクスピヤ」

8月▽「大阪に於ける文芸協会」 東儀鉄笛

歌舞伎 134号 69～71頁

大阪角座の『ハムレット』公演について。

10月★『須因頓氏英文学詳解』 岡村愛蔵訳注

興文社

「法庭審問の場」所収

10月☆『須因頓氏 英文学詳解』 岡村愛蔵訳注

興文社

「一卷一章 Shakespeare」 1～64頁

10月☆『劇と文学』坪内逍遙著

富山房

「近松対シエークスピヤ対イブセン」「近松とシエークスピヤ」「日本に沙翁劇を興さんとする理由」「沙翁劇の翻訳について」「『ハムレット』の公演に先だちて」「『ハムレット』の進化」』ハムレット』に就いて」「『ハムレット』公演後の所感」「沙翁記念国立劇場の事」「シヨアの近作『ソネットの黒婦人』」「『オセロー』に就いて」

10月☆『世界偉人譚』 稲村露園訳

富田文陽堂

「文界の帝王シエクスピーア」 61～67頁

11月▽『文芸協会演劇 絵本筋書』 帝国劇場 28日開演

「人形の家」(三幕)、「□ニスの商人」(法廷の場、坪内逍遙訳)、ほかに舞踊劇三篇の同時上演。逍遙訳の「□ニスの商人」は明治39年11月歌舞伎座において初演。配役は、

シャイロツクを東儀季治、ポーシャ姫を土肥庸元。同時に上演された「人形の家」のノラ役の松井須磨子に注目が集まり、影が薄かった。「その夜の公演を通じて私の目の中には只松井須磨子が活躍してゐた。日本で一番美しい帝国劇場の舞台も舞踊劇も目玉の大きい東儀のシャイロツクも何もなかった。只、ノラがあるだけだった。」(長田秀雄『新劇の黎明』)

11月☆「教化機関としての演劇」 坪内逍遙

早稲田講演 1巻7号 1〜25頁

シェイクスピアを素材にして、教化機関としての演劇について述べる。

12月☆「諸名優のシャイロツクの型」 松居松葉

劇と詩 15号

一九一二(明治45)年 「7月30日大正に改元」

1月▽「沙翁劇に就ての疑問」 長谷川天溪

太陽 18巻1号

2月★「喜劇 陽気な女房」 松居松葉訳

文芸倶楽部

「ウインザーの陽気な女房」

2月★「あらし序幕」 坪内逍遙訳

早稲田文学

「あらし(原書訳)」

2月☆『トルストイの芸術観』 松浦一

弘道館

「トルストイ伯が沙翁論に適用したる芸術観」(1〜15頁) ほか。

3月☆『舞台と面影』 林翠浪

春陽堂

「オセロとハムレットの型」

179〜197頁

4月★『リヤ王』 坪内雄蔵(逍遙)訳

早稲田大学出版部

「リア王（原書訳）」

5月◇文芸協会の第三回公演が行われる。演目はズーダーマン作『故郷』（島村抱月訳並びに指導）。

『故郷』が取りあげられたのは、無論『人形の家』の反響によるものだった。が、『人形の家』よりも通俗味に富んでみただけに、一層好評だった。（「河竹繁俊『新劇運動の黎明期』。『故郷』や『人形の家』が人気を博す一方で、それを演出した島村抱月と逍遙の間がぎくしゃくしはじめ、やがて大正2年7月の文芸協会解散へといたる。島村と逍遙の仲がうまくいかなかったのは、ノラやマグダを演じた松井須磨子との恋が主な原因であったが、それだけではない。須磨子と同じ文芸協会演劇研究所の一期生で、『人形の家』の演出助手をつとめた河竹繁俊は、その原因について次のような証言を残している。「島村と須磨子の事件は、確かに協会の解散を誘導した大きな原因ではあったが、必ずしも解散の直接原因ではなかった。それはむしろ東儀（鉄笛）・土肥（春曙）の両者と第一期生との乖離にあつたと言はねばならない。」（同上）。

6月★「リア王」 磯辺弥一郎訳注

中外英字新聞（〜大正2年8月）

「リア王（訳注）」

6月☆ [King Lear [訳注]]

中外英字新聞 19巻12〜24号、20巻1〜16号

7月☆ 「陛下座の「オセロ」」 坪内士行

歌舞伎 145号 19〜28頁

ロンドンの観劇記。

12月▽ 「ハムレット劇の感想」 山宮允

開拓者 7巻12号 34〜36頁

「十一月十一日まで帝劇で演ぜられたウイルキー一座の沙翁劇は可成に都会人の心を

牽いたらしく毎夜少なからぬ観客であつた。これは彼等一座のものに取つて寧ろ以外の成功であつたであらう、が、この多数の観客が素より直ちに彼等の芸の優秀なることを説明するものとは云ひ得ぬのである。——全く彼等の開演の時期がよかつたため、都会人の好奇心に投じたといふに過ぎなかつた。近頃日本では翻訳劇が行はれ一般に西洋演劇に対する人々の注意が鋭くなつて居る際に一座の来たのは全く時機がよかつたのである。洵に日本で始めての、西洋俳優の沙翁劇で、西洋演劇に渴れてゐる日本人には俳優の品質を問ふの隙さへなかつたらしく思はれる。かくて旅役者の群は意外の名誉を加へて帝都を去つたのである。」